

2021年10月1日



月刊

# もぐら通信

2024年8月1日 第141号 初版

<http://abekobosplace.blogspot.jp>

あなたへ:  
迷う事のない迷路を通して  
あなただけの番地に届きます

電話

042-ABE-KOBO

FAX

042-KOBO-ABE

もぐら通信を自由にあなたの《友達》に配付して下さい



## 目次

- 1 目次...page 2
- 2 記録&ニュース&掲示板page 3
- 3 巻頭詩（26）：防波堤：安部公房.....page 4
- 4 周辺飛行（50）：4。『安部公房スタジオ会員通信』（5）：第5号：岩田英哉...page 5
- 5 『文章読本』論（5）：川端康成：岩田英哉.....page 11
- 6 糞尿と性愛の文学~生殖器・排泄器同一社会論仮説~（3）：1。古事記の中の糞尿と性愛/1.1 神武初代天皇の皇后（きさき）の出生譚（2）：待て次号：岩田英哉...page 23
- 7 ネット・モナド論（21）：7.4.6 催眠術とプロパガンダ：岩田英哉...page 24
- 8 私の本棚（39）：●：岩田英哉...page 25
- 9 *Mole Hole Letter*（64）：超越論II（第七回）：岩田英哉...page 23
- 10 サンチョ・パンサを求めて（16）：コンピュータ時代にはどんな人間が強いのか（1）：岩田英哉...page 40
- 11 縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（21）：5.16.4 八の音義は何を意味するか（承前3）：岩田英哉...page 51
- 12 Topologyで日本の文化を解説する：内なる辺境シリーズ（12）：扇：岩田英哉... page 62
- 13 編集後記...page 55
- 14 編集方針.....page 56





## The best tweets of the month

Golden Mole  
Prize

該当なし

Silver Mole  
Prize

該当なし

## 今月の浅野和之

八嶋智人@meganeouji840-Sep 16

そしてシスカンパニー公演『友達』を偶然、高橋克実先輩とRed heart  
観劇後、感想を熱く立ち話してたら、偶然、楽屋から出てきた浅野和之大先  
輩がRed heartっていうか、浅野先輩は、安部公房スタジオ出身だDouble  
exclamation mark やっぱり演劇の神だDouble exclamation mark  
楽しい偶然をありがとうございました神様 Red heartありがたやあ～Red  
heart



## 今月の反文化大革命

西村幸祐@kohyu1952・21h

数年前から指摘していたが、習近平は〈21世紀の文化大革命〉を始める。し  
かもGAFAと組む恐ろしい計画です。今こそ54年前の昭和42年(1967)に三島  
由紀夫と安部公房が川端康成と石川淳を誘い、文化大革命への反対声明を出  
した事に注目したい。このテーマは次著で大きく触れる。鋭意執筆中なので  
ご期待を



巻頭詩  
(26)

防波堤

安部公房

長い防波堤にそつて  
笑ひ乍ら静まつて行く心に  
砂は輝いて正午を告げる

一度僕等は波の間に  
白く泡立つしぶきだつた  
拙い試みの中で  
無数の中に消滅して行く為に

しかし再び帰つて来た  
無くなつた名前を證しに立て、  
心の外に帰つて来た

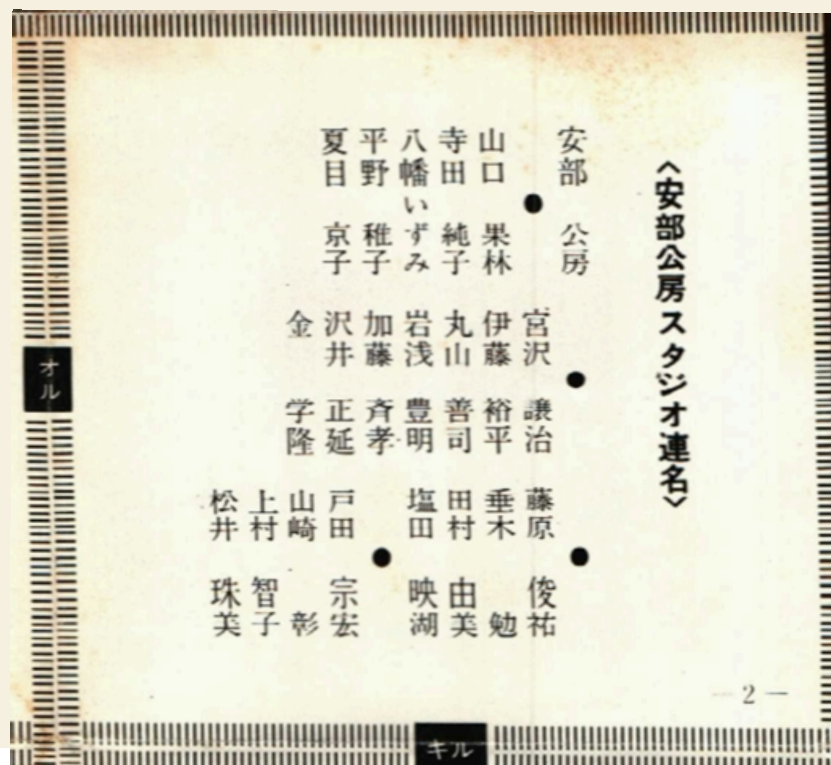
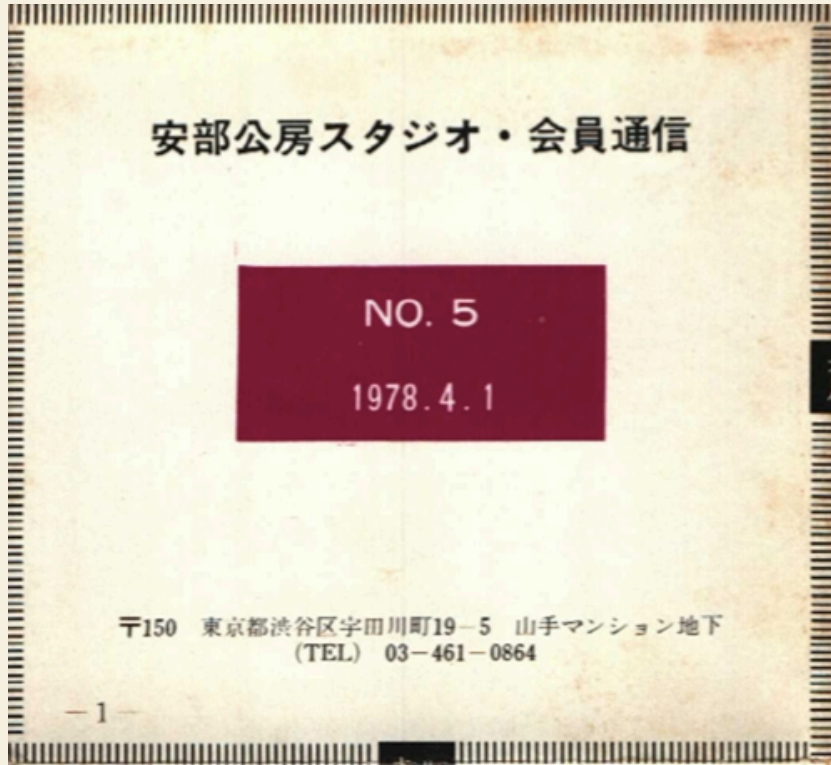
友よさようなら  
長い防波堤に腰を下して  
僕達は笑つた……………輝く日



# 周辺飛行

(50)

4. 『安部公房スタジオ会員通信』 (5)



〈公認水難救助法〉



第六回スタジオ公演  
**「人命救助法」**  
 作・演出 安部公房  
 4/23-5/3



〈人命救助は手段を選ばない〉

- 3 -

16キ

16キ

出演者の横顔 No.1  
 丸山善司 舞台歴  
 「愛の眼鏡は色ガラス」(1973)  
 「鰐魚」(1973)  
 「友達」(1974)



稽古から



丸山 善司

「緑色のストッキング」(1974)  
 「ウェー」(1975)  
 「幽霊はここにいる」(1975)  
 「イメージの展覧会」(1977)  
 「水中都市」(ガイドブックⅢ)  
 (1977)

- 4 -

16キ



キル

オル

## 通信 安部公房

「人命救助法」は、十七年前、テレビのために書下した作品である。この主題には、なぜか今もって、強く僕をひきつけるものがある。あらためて舞台の上で挑戦してみたい。

今年スタジオの仕事に全力をそそぎこむつもりでいる。昨日、「イメージの展覧会」の西日本公演を終え、東京に戻って来たところだ。大阪でも名古屋でも、立見の客で劇場があふれるほどの盛況だった。反応にも適確で深いものがあった。待たれていたのだという手触りを感じる事が出来た。その確信を踏みしめながら、さっそく明日から「人命救助法」の稽古にとりかかる。

（鑑賞のためのほとんを役に立たないヒント）  
人命救助が困難なのは、動きまわる死体が多すぎるためである。

- 5 -

キル

## 内なる安部公房

埴 嘉彦（『海』編集長）

二月のスタジオ公演「ダム・ウェイター」の初日を御覧になった方なら、これからはじまる舞台を前に、上演の主旨を語った安部さんの表情をおぼえておられることでしょう。ほとんど不器用なまでの卒直さで、一語一語を探るようにして、論理をたどるのですが、その結果、言葉はよく洗練され、自由に劇場の空間を泳いでいたように思います。

昨年末から初春にかけて、安部さんは私たちの雑誌（『文芸雑誌「海」』）の求めに応じ、三日間、十数時間にわたるインタビューを引き受けられました。その間の安部さんの印象を申し上げます。このインタビューは、安部さんと遠くへだたりません。このインタビューは、安部さんが他の作家や批評家を介することなく、いきなり編集者の水準、すなわち読者の水準に身を置いて語ったという意味で、特筆すべきものです。つまり、拳闘の言葉で言えば、安部さんはガードを解いて語っています。そして、それゆえに、みずからの内なる言葉と論理を、探り、解き放ち、洗練していく過程に、私たちが立ち合わせてくれます。

オル

（この洗練するという言葉を、私は本来の意味、すなわち野生の原料から強靱な糸や刃がみぎき出される過程を示す言葉として用いるのですが、安部さんの作品、とりわけ近年の舞台に接してこられた方であれば、そこに英語で言うソフィスティケートという色合いをも加えて下さるだろうと思います。）

とここで、「内なる」という形容語に積極的な意味を与えたのは安部さんです。この言葉は、近年、「われらの内なるヒットラー」という名著が示すように、

- 6 -



キル

(この洗練するという言葉を、私は本来の意味、すなわち野生の原料から強靱な糸や刃がみぎ出される過程を示す言葉として用いるのですが、安部さんの作品、とりわけ近年の舞台に接してこられた方であれば、そこに英語で言うソフイスティケートという色合いをも加えて下さるだろうと思います。)

ところで、「内なる」という形容語に積極的な意味を与えたのは安部さんです。この言葉は、近年、「われらの内なるヒットラー」という名著が示すように、私たちの内にあるものを告発し、否定し、ときには忘れ去るために用いられてきました。しかし、安部さんが「内なる辺境」と言うとき、そこには否定的な意味合いも、またシニスムの驕りもありません。安部さんは、私たちの内なる都市的なものに光を当てよう、私たちが誘います。それがどのようなものであり、いかにして明るみに出されるか、スタジオを訪れる方はよく御存知だろうと思います。私は編集者という職業の偶然から、先ほど申し上げたような安部さんの表情に接しましたが、スタジオは、その定義からして洗練の過程を示すものであり、安部さんとともに内なるものを探り、解き放つていく、特権的な場であろうと思

— 7 —

オル

闘の言葉で言えば、安部さんはガードを解いて認めています。そして、それゆえに、みずからの内なる言葉と論理を、探り、解き放ち、洗練していく過程に、私

キル



ミルワールキーレパートリ  
「友達」の舞台より 演出 ジョルジュ・ドロン  
撮影 安部公房

— 8 —



14+

**豊橋**

12:39着。稽古1回。本番2回。荷物をトラックへ積み込む。22:24寝台に乗り込み一路九州へ。あわただしい旅の始まり。

**小倉**

席数1786の大劇場では、花道から「ゲゲ」登場。高校生数名観劇後、「ゲゲ」にトライノ3歩でダウン

イメージの展覧会西日本公演便り



**名古屋**

またまた大入袋。千秋楽を無事終え、一同旅の疲れも忘れて深夜1:00の夜行に乗り込む。トラック走行距離3000km。

**大阪**

劇場はかつて以来の当日席約280枚。大入袋。立見が出て、関係者一同興奮気味。

— 6 —

14+



藤原俊祐



田村由美

**新人**



垂木 勉



塩田映湖

— 10 —



六月公演

イメージの展覧会パートII

人さらい

六月三日(土)～七日(水)

三日(土)と七日(水)は昼夜二回

西武美術館(西武池袋店)

関西公演

ガイドブックIII 「水都市」

六月十六日(金)～十八日(日)

十七日(土)は昼夜二回

西武大津ショッピングセンター

七月三日(月)

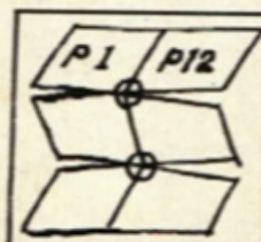
大阪毎日ホール(予定)

▽会員の皆様へ

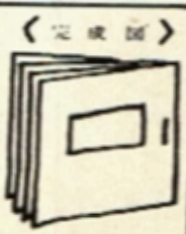
○第五回スタジオ公演「ダム・ウェイター」は、おかげさまで大好評でした。四月の「人命救助法」に続く、次回八月のスタジオ公演には「おまえにも罪がある」を予定しています。御期待下さい。

※

○公演ポスターの掲載場所(店頭・学校等)を募集します。お心当りの方は、ハガキに住所、氏名、会員番号、電話連絡先★掲載場所の住所、電話番号を明記の上、スタジオ宛にお送り下さい。御紹介頂いた会員の方には、六月西武美術館「イメージの展覧会パートII」又は、十月の西武劇場「ガイドブックパートIV」の招待券一枚を送らせて頂きます。皆様の御協力をお願い致します。



- ・○印を残し切り込む
- ・P1とP12が表になるように折る
- ・二つ折にし、閉じる





## 『文章読本』論

(5)

川端康成

岩田英哉

## 5。1950・昭和25：川端康成（51歳）明治生

川端康成の文章読本の、文章といふものの本質について訴へるところは、一読して「まえがき」と全十章からなる本文の各章の最初の一行を並べてみると、そこに此の作家の考へがよく現れてゐるので、そのやうな構成で此の文章読本の趣旨をお伝へしたい。しかし順序は此の逆でありまして、このノーベル文学賞受賞作家が、最初の一行に結論を書いて、その後に模範となる例文を挙げるといふ構成を採つてゐるので、こんな楽なまとめ方ができるのです。

## 1。「まえがき」

以下、全文を引き写します：

「少年時代、私は「源氏物語」や「枕草子」を読んだことがある。手あたり次第に、なんでも読んだのである。勿論、意味は分かりはしなかった。言葉の響きや文章の調を読んでいたのである。

それらの音読が私を少年の甘い誘惑に誘いこんでくれたのだった。つまり意味のない歌を歌っていたようなものだった。

しかし今思つて見ると、そのことは私の文章に最も多く影響しているらしい。その少年の日の歌の調は、今も尚、ものを書く時の私の心に聞こえて来る。私はその歌声にそむくことは出来ない……。

右は、古い私の文章の一説であるが、読みかえしていま、文章の秘密もそこにあるかと思うのである。

文章を単に小説の一技術とみなす風潮が、どれほどわれわれの文学を貧しくして来たであろうか。昔は、文章は即ち人といわれていた。文章それ自身が、一つの生命を持って生きていた。私のこの拙い一冊はまた、思えばそうした、「生命ある文章」へのノスタルジアであろう。

文章は、人と共にあり、時と共に移る。一つが消えれば、一つがあらわれる。文体の古び方の早さは思ひの外である。

つねに新しい文章を知ることは、それ自身小説の秘密を知ることである。同時にまた、新しい文章を知ることは、古い文章を正しく理解することであるかも知れぬ。

明日の正しい文章を……生きてゐる生命ある文章を考えることは、私たちに課せられた、光栄ある宿命であろう。

昭和二十五年十月

川端康成」

新潮文庫版の巻末にある伊藤整による「解説」の冒頭に、この文章読本を著した当時の川端康成の思ひについて、次のやうに書いてある。

「川端康成氏のこの本の大部分をなす文章論は、戦後鎌倉文庫から出ていた「文藝往来」に連載されたものである。氏の文学論的な芸談としてのこの書は、珍しく進んで書いた積極的な気配の強いものである。」

この「積極的な気配の強」さを、上掲の「まえがき」に読んで欲しい。この序文は、川端康成といふ人の人生の全てを表してゐるのではないだらうか。さう私には思はれる。年齢に少しも関係なく。即ち、この文章は、川端康成といふ作家の初心ではないだらうか。この作家の初心は、小林秀雄の『川端康成』論では次のやうに書かれてゐる。

小林秀雄は川端康成のよく云ふ童話と云ふ言葉が、この作家の初心だと、文字では書いてゐないが、さう書いてゐる。この童話と呼ばれてゐる初心は、批評家のいふところでは、「彼自身が、言葉通り処女作であり、唯一の真率な自伝であると言ふ「十六歳の日記」」が、「子供のものとは思へぬ強い正確な筆致」で書かれてゐて、「日記の一番優れた鑑賞者は川端康成自身だ」といひ、「恐らく、日記は心中で次第に育つて行つた」のであるが、大人になつて作家として世に出ても、この日記は作家の心中で成長を続けてゐる。これを、この作家は童話と呼んだのだと、小林秀雄はさう読んでゐる。だから、文章の見かけがどうであれ、当時川端康成を表するのに「奇術師」と呼ばれるやうな複雑な人を騙すやうな心事はどこにもなく、これは複雑な世間を複雑に生きようとする人たちの誤解であり、この誤解を正すために「彼自身好んで口にしながら曖昧に使つてゐる童話といふ言葉を、僕は、ややはずり使つてみたい。彼にとつて童話の国は、天上にあるのではない。大人の認識の果てにあり、彼方（あちら）にあるのではなく、寧ろこちら側にあるのである。常識が、何かにつけ憧れてみせる天真爛漫な子供の天国といふ様なものは、この作家が一番信用しないものである。さういふ空想は少年の「日記」の何処へも這入り込む余地はない。

少年が、ただ真率に生きてあるといふ最小限度の才能を以つて描き出したものが、人間の病や死や活計の永遠の姿であるとは驚くべき事ではないのか。そして、何故この少年の世界が、あらゆる意見や理論や解釈や批評の下に、理想と幻滅とが乱れ合ふ大人の複雑に加工された世界に抗議して立ち上がつてはいけないか。

(略)

川端康成の小説の冷たい理智とか美しい抒情とかいふ様な事を世人は好んで口にするが、「化かされた阿呆」である。川端康成は小説なぞ一つも書いてゐない。(略)凡そ小説家の好奇の対象となるものに、この作家が、どんなに無関心であるかは、彼の作を少し注意して読めば直ぐ解る事である。彼が、二人の男、二人の女さへ描き分ける才能を持つてゐないのを見給(みたま)へ。」と、批評家は論じてゐること、これが、そのまま川端康成の文章読本の背景なのであり、「まえがき」が、単純な姿をした、少しも複雑ではない少年の姿を表した前景である。いひかへれば、この「まえがき」が、川端康成の童話であるといつてもいいのです。それほど真率に此の読本を書くべき動機が此の作家にはあつた。時は、この序文の書かれた昭和二十五年を、その前後の少し幅広い時間をとつて其の中に置いて見ると時代的な背景がよく判ります。

- 1932年(昭和7年)
  - 五・一五事件
- 1936年(昭和11年)
  - 二・二六事件
- 1941年(昭和16年)
  - 対英米宣戦布告
- 1945年(昭和20年)
  - ポツダム宣言受諾
- 1946年(昭和21年)
  - 日本国憲法公布
- 1950年(昭和25年)
  - 川端康成『文章読本』
- 1951年(昭和26年)
  - サンフランシスコ講和条約
- 1953年(昭和28年)
  - テレビ放送開始
- 1956年(昭和31年)
  - 国際連合加盟



●1960年 (昭和35年)

■東京タワー完成

●1960年 (昭和35年)

■日米新安保条約調印

(Weblio辞書：<https://www.weblio.jp/content/昭和25年>)

各章に見出しはない。私が便宜のためにつけました。

## 2。第一章：この文章読本の目的

「日に新たな文章の道は、戦争以後はその特長が殊に著しいやうで、しかし底に流れる一つのは案外不変なものではなからうか。永久に古く、しかもつねに新しい何かを求めるのが、われわれの道かも知れぬ。

(略)

本校は、文章への素直な道に読者を誘ふのが目的であれば、徒に奇警の言を吐いて、読者を驚かせることは避けたい。」

## 3。第二章：文章に実用と藝術の区別なし

「小説に於ける文章を説く前に、しばらくもつと根本的な文章に関する問題を二三考えてみたい。

俗に、藝術的文章と実用的文章と二つの区別あるやうにいわれるが、これは果たして如何であろうか。結論を先にいえば、私はその差別を認めぬ。文章とは、感動の発する儘に、自己の思ふことを素直に簡潔に解り易くのべたものを良しとする。古来文章の理範として「華を去り実に就く」といはれたのも、この所であらうか。」

この「藝術的文章と実用的文章と二つの区別」はないといふ断言は、谷崎・菊池寛と同じ主張です。

## 4。第三章：文語体と「分からせること」

「古典文学の文章は、すべていはゆる文語文で書かれてある。しかしその中にも和文調、すなはち、「土佐日記」「源氏物語」のやうなもの、「保元物語」「平治物語」など軍記物にみられる漢文調との二つの種類があることに、読者は気づかれるであらう。

(略)

何故和文調が早く滅び、漢文調が長く命を保つたかについて、(略)」

が命を保つたといふ理解も谷崎と同じです。つまり、これが当時の一流の作家たちの共有する文章の基礎である文の調子、即ち文調、即ち文章の調べに関する理解であつた。

川端康成は、この二つの調子について述べた後、和文調の文体を文語体と呼び、言葉を変へて論を続けるのであるが、その理由は少し先を読むと、次の川端の法則性を備へた、または法則に基礎を置いた文体・様式・style・スタイルがなければならないといふ主張のあることが判ります。これもまた、これまでみてきた、私たちの結論と同じです。結局、今に至るまで日本語の文章の問題は、汨濫して整理のつかぬ無法な語彙と様式・文体の確立または未確立の問題なのです。勿論、川端も文章の要諦は達意の文にあることは重々してゐる。しかしその上で、次のやうに述べてゐる。

「文章の真諦は「分からせる」ことにあるといつても、そこには自ら一つの限度があるやうである。文章口語化の意味が、そのことだけにあると思うことは頗る危険で、口語体の文章ならば、文語体の文章よりも「分かりよい」と思ふことは非常な誤りである。口語体の第一の危険は無法則といふ点に横たはる。外来語の粗雑な翻訳や、新造語の乱用がいかにか今日の文章を、口語化の悲願から遠く隔ててゐるか……今日、雅文体の流れをくむ一部の作家の文章が、簡潔流麗、一般に愛好される実例は、痛烈な皮肉である。

文語体はもはや今日死語であらうとも、そこに芽ばえ、そこに大成した音感的効果と視覚的效果はやはり今日も一つの問題を生む。」

ここで、川端は、次の二つの筆記上、文字上の効果を日本語に認めてゐる。

- (1) 視覚的效果 (漢字とかなの併用による)
- (2) 音楽的效果 (文章の持つ声調といふ文調)

後者(2)について、「音楽的效果についてもさうで、「耳できいて解る文章」とは、私の年来の祈りである。今日の口語の乱脈は、時に上述の如く私をしてローマ字による作文を思はせる一方、また往昔の文語体をすらなつかしむ心さへ湧かしめる。」と述べてゐる此れは、特に「耳できいて解る文章」とは、谷崎が谷崎の文章読本で述べてゐるところと全く同じである。谷崎の言葉では次のやうになる。

「文章を綴る場合に、まづその文句を実際に声を出して暗誦し、それがすらす

らと言へるかどうかを試してみることが必要でありまして、もしすらすらと言へないやうなら、読者の頭に入りにくい悪文であると極めてしまつても、間違ひはありません。現に私は青年時代から今日に至るまで常にこれを実行してゐるのでありますが、かういふ点から考へましても、朗読法といふものは疎かに出来ないものでありまして、もし皆さんに音読の習慣がありましたら、蕪雑な漢語を無闇に羅列するやうなこともなくなるであらうと信ずるのであります。」  
(第一章「一 文章とは何か」の中の「○現代文と古典文」)

この引用の第一章を読みますと、谷崎もまた文章の眼目は「わからせるやうに書く」と太字で強調してゐますので、川端康成は当然に谷崎の文章読本を読んだ上で、この眼目に同意もした上で、「文章の真諦は「わからせる」ことにある」と鉤括弧の引用記号をつけてゐるのですが、此の後の二人の文章の筋道が面白い。谷崎は文章の要諦の二つ目に「「わからせるやうに」書くためには「記憶させるやうに」書くことが必要なのであります。」と主張してゐるのに対して、川端は、これが谷崎の主張に対する回答なのでありませう、これが様式・文体の働きであるといつてゐるのです。

文豪二人が「耳できいて解る文章」を書けと主張してゐることは傾聴に値しません。

#### 5. 第四章：文章は生きて成長する

川端がこの章で述べてゐるのは、如何にも日本語の作家らしく作品の持つ再帰性への言及であつて、また此れは、川端の作品はメタSF文学に帰属するのではないかといふ考察を呼び覚ます言葉になつてゐます。即ち、文章読本といふ作品の持つ自律した意志についての言及で此の章は始まるのです。かういふ文章を読むと、川端康成といふ人は本物の作家だと思ふ。

「三章にわたり、文章に関する私見をのべて来たが、この種理論は、たとへ千萬枚を費しても、終ることはあるまい。作家の生命は文章で、作家が日に月に己の作を磨くとすれば、当然日に月に己の文章の成長発展を祈るであらう。いはば、己の章論は、日に月に進歩し発展すべきで、従つて概論はたとへ如何に精をつくし確を究めると雖も、一個の生きた文章には及ばない。本稿の趣旨もまた、堂々たる文章の学究的論文にあるのではなく、一作家の文章私感である。」

とあつて、この後に「生きた文章」について述べるために、次の作家と作品を



論じてみる。

- (1) 徳田秋聲『爛』
- (2) 志賀直哉『城崎にて』
- (3) 泉鏡花『歌行燈』

作品からの引用はないが、これ以外に、横光利一、里見弴の名前を挙げてゐる。

この章の最後に鏡花と秋聲が尾崎紅葉の門下であることに読者の注意を促してゐるのは、上記の文語体の意義に、口語体の無法則な使用ではなく、様式・文体を備へた例として研究せよといふ勧めです。

#### 6. 第五章：新文学在る所つねに必ず新文体あり

この章は、新しい学の思潮の登場は、新しい文章を伴ふといふことについての章です。

「私はさきに、しばしば、新文学在る所つねに必ず新文章あり、と述べて来た。独自の文章・文体を持たぬ限り、傑出した作家にはなり得ないとも書き、各々の作家は各々の個性を持つやうに、当然文章・文体にもつねに独自の風を作り上げてゐた、とも書いて来てゐる。」

この「好個の例」として、川端は横光利一の初期作品を例にとつて論を進める。何故なら、「横光利一氏ほど、文章表現の変貌を重ねた作家は稀で、又それが新奇を目ざす気紛れではなくて、実に文章の近代的表現への苦闘であつたからである。」ここで川端が文章を引用して解説を加へてゐる作品は、次の六つです。

- (1) 『芋と指環』
- (2) 『皮膚』
- (3) 『機械』
- (4) 『紋章』
- (5) 『旅愁』
- (6) 『微笑』

これらを挙げて文体の変遷を解説した後に、この章の最後の、三行からなる短い段落の冒頭に川端は次のやうに書いてゐる。

「横光氏の文章変遷史が、そのまま現代文章の変遷史である。」

### 7. 第六章：文体とは何か

この章は文体論です。

「スタイルは出発点になることは出来ない。それは結果として現われるべきだ。」（原文傍線は傍点）

フランスのジャン・コクトオとフローベルの引用をしてから、奇を衒つた「ごまかし」のない作家として次の日本の作家の名前を挙げてゐる。

「大まかな言ひ方をすれば、極く最近の、日本小説の、文章上の功労者を数へるならば、泉鏡花、徳田秋聲、武者小路実篤、志賀直哉、里見淳、菊池寛、宇野浩二、横光利一の諸氏であらう。」

そのほかに追つて、芥川龍之介と久保田万太郎、太宰治、織田作之助の名前が挙げられてゐる

### 8. 第七章：文章は作者の血肉である

この章では、文章は作家の肉であり血であることが述べられてゐる。

「文章でもつねに怠らぬ努力は、いつか作者の血となり肉となるのではあるまいか。」

例文として、鏡花の『南地心中』の第十九節の書き出しと、里見淳の『椿』と、秋聲の『町の踊り場』の一節、それに菊池寛の『入れ札』の書き出しを挙げてゐる。更に筆を進めて、谷崎潤一郎の『蓼食う虫』の「十の一節」を、佐藤春夫の『賣笑婦マリ』を引用して論じてゐる。

### 9. 第八章：語彙の選択

この章は、様式・文体に大いに関係する語彙の選別と選択の話の章です。

「単語のよき選択はよき文章の第一歩……と、私は先きのべたが、その間の消

息は、凡百の理論よりも、まづ個々の作家の文章をみれば、一目瞭然であらう。

私は、以下、アト・ランダムに、数人の作家の文章を引用してみよう。」とはじめて、以下、

- (1) 芥川龍之介
- (2) 里見淳
- (3) 横光利一
- (4) 宇野浩二
- (5) 泉鏡花
- (6) 武者小路実篤

これらの名を挙げて、「その用語の差をみることによつて、文章の秘密を探るべきであらう。」として、例文を挙げながら、本題に入つてゐる。

### 9。第九章：文章の長短

この章は、文の長短を論じてゐる。

「センテンスの長短は、それぞれ特長と欠点を持つて、その優劣は決すべきではないが、要は、用語と同様、このセンテンスの長短にそれぞれの作家の作風あり、と知るべきである。」

ここまで読んで来ると、谷崎と川端康成の文章の構成要素分解をして論ずるそれぞれの文章要素は、重なりあつてゐます。谷崎の文章読本では、この文章の長短は見出しとしては直かにはないが、「三 文章の要素」章の「○調子について」の節の「一流麗な調子」の段に同じ主題が論ぜられてゐる。

川端康成は短いセンテンスの例として、久保田万太郎の『寂しければ』の冒頭を引用し、長いセンテンスの例として、永井荷風の『つゆのあとさき』の一節を引いてゐます。この長いセンテンスの作家の名前として、この他には、次の作家を挙げてゐる。

- (1) 正宗白鳥
- (2) 谷崎潤一郎
- (3) 佐藤春夫
- (4) 宇野浩二

また、長いセンテンスの「最近の作家として」これら四人の次に、次の名前がある。

- (5) 高見順
- (6) 石川淳

### 10。第十章：描写と説明

この最後の章は、描写と説明といふ小説の二つの書き方についての章です。

この章を読むと、以前小林秀雄の『菊池寛』論で言及されてゐた「描写のうしろに寝てゐられない」といふ言葉は、高見順の同名の評論によるものであることが判ります。

さて、当時議論となつた描写と説明はどう違ふか。

「描写と説明は、車の両輪の如く、文章には必ず欠くことの出来ぬものである。そのいずれを重しとすることも、許されない。

(略)

以前は文壇で、「説明」と「描写」といふことがやかましかつた。一口にいふなら、描写とは事物を具象化すること、具体的に書き現すことである。感覚で感知できるやうな世界を、言葉で築き上げることである。」

このあとイソップ物語の描写の例として説明をして、「文藝作品中の描写を大別すると、自然描写と人物描写との二つとなる。」と述べてゐます。さうして、「自然描写が全然欠けてゐる作家」と「自然描写に於いて傑れてゐる作家、又はそれを比較的多く取り入れてゐる作家」として次の作家たちの名前を挙げてゐます。

#### (1) 「自然描写が全然欠けてゐる作家」

- ①武者小路実篤
- ②菊池寛
- ③正宗白鳥
- ④牧野信一

(2) 「自然描写に於いて傑れてゐる作家、又はそれを比較的多く取り入れてゐる作家」



- ①佐藤春夫
- ②里見淳
- ③志賀直哉
- ④横光利一
- ⑤室生犀星
- ⑥吉田紘二郎
- ⑦永井荷風
- ⑧田山花袋
- ⑨島崎藤村
- ⑩小川未明

それでは、説明についてはどうか。説明については、川端康成は何も説明の例を挙げてみない。高見順の評論『描写のうしろに寝てゐられない』を挙げてみるだけであり、この高見順の主張に真つ向から対立する主張として「新進作家時代」の小島政二郎の「描写万能論」を「好個の対称をなす」ものとして言及してあるだけである。恐らくは、説明といふ一語で普通に理解される範囲で読者が理解すれば誤解はないと考へたのであらうと思はれます。ちなみに説明とは、

#### 「せつ-めい【説明】

[名] (スル)ある事柄が、よくわかるように述べること。「説明を求める」「科学では説明のつかない現象」「事情を説明する」

[用法]説明・解説——「この件について説明(解説)してください」など、わかりやすく述べるの意では相通じて用いられる。◇「説明」は、「医者が病状を説明する」「相手に説明を求める」「事件のあらましを説明する」「電気器具は説明をよく読んで使用したほうがいい」のように、使われる範囲が広く、客観的な感じがある。◇「解説」は、「事件の背景を解説する」「作品の解説」「ニュース解説」のように、ある事柄について分析し、その生じた理由や背景、他に与える影響などにまで言及することが多い。」

(デジタル大辞泉「説明」の解説：<https://kotobank.jp/word/説明-548497>)

この最後の章の最後に川端康成は「文章の秘密」について次のやうに述べてゐる。その引用する文例は、丹羽文雄の『厭がらせの年齢』、船橋聖一の『川音』、林芙美子の『風琴と魚の町』、太宰治の『葉』からである。

「文章の秘密は、技巧よりも情熱、姿よりも心といへるのであらう。単に文章のみならず、多くの作家はその生涯、処女作以上の傑作を書き得ないやうである。処女作が頂点で、あとはそのバリエーションである場合が実に多い。」

小林秀雄の『川端康成』論に云ふ、この作家の『十六歳の日記』が処女作であるといふ、この批評家の慧眼は鋭い指摘だといふことになります。何故なら、小林秀雄は処女作に其の作家の全てがあるなどといふ文句を千篇一律の教条主義で信じて『川端康成』論を書いてゐるわけではないからです。とすれば、『様々なる意匠』もまた、川端のいふやうに「多くの作家はその生涯、処女作以上の傑作を書き得ないやうで」あつたかと問へば、やはり答は否、この批評家も、範疇の異なる文学以外の藝術範疇の選択毎に変貌を続けたのであり、初期安部公房（初期作品群）と初期三島由紀夫（特に『夢野之鹿の雪』）の言葉でいへば、「転身」を続けたことが、その作品群の全体から解るからである。

2021/09/12, 09/20 eiya iwata							
文章読本からみた近代日本史							
元号	元号の年数	西暦	事変	作家名	作品名	備考	
明治	元年	1868	明治維新			日本の作家にとつて、この間の文章上の問題は常に、語彙の選別と文体・style・様式の確立の問題であつた。	
	18	1885		坪内逍遙	小説神髓		
	30	1897		同上	当世書生氣質		1886年まで連載
大正	12	1923	関東大震災	谷崎潤一郎	金色夜叉		関西へ移住
	9	1934		谷崎潤一郎	文章読本		
昭和	12	1937		小林秀雄	菊池寛論		
				菊池寛	文章読本		
	20	1945	ポツダム宣言受諾				
	21	1946	日本国憲法公布				
	25	1950		川端康成	文章読本		
	26	1951	サンフランシスコ講和条約				
平成	7	1995	阪神・淡路大震災			平成の30年間は文章と生活実感の乖離した30年間であつた。これが文章読本から見た平成の30年間である。経済の面では失はれた30年。文化の面では報道記事の事実を裏切る捏造・虚報ばかりの30年であつた。	
	12	1937	三陸沖地震				
令和	元年	2019					

*Mole Hole Letter* (64)

## 超越論 II (第七回)

岩田英哉

言語モデルを提示する前に、ここまで縄文思想でもある私たちの超越論を論じてきて、ヨーロッパの人間たちがmodern・モダン・近代と呼ぶ時代に対する私たち日本の世界史に於いて占めてある位置が明確になりましたので、明らかになったことを元に、以下に論点を整理します。この私たちの日本文明の占める世界史的な位置といふものは、次の二項対立に関する第三の道を、私たちの超越論、即ち汎神論的存在論の道として示すことです。従つて、以下の論点は、日本に於いてのみならず、世界史上での、これからの政治の形態と経済の形態にまで話は及ぶことになるでせう。「1. 自由と奴隷」及び「2. 都市と自然」といふ主題は『ソクラテスは何故哲学者か』（『サンチョ・パンさを求めて(14)』もぐら通信第139号)からの引用です。

**1. 自由と奴隷**

- 1.1 貧富の格差
- 1.2 言論の自由

**2. 都市と自然**

- 2.1 人工・人造と自然
- 2.2 都市と中産階級
- 2.3 都市と田舎（または都市と田園）
- 2.4 国家の国体と国政

上記2の都会と自然といふ論点は、既に論じた小林秀雄の閉ぢ込められた都会の詩人ボードレールの球体と其処から如何にアフリカ大陸で商売に携はつたランボーの詩によつて球体を打ち壊して脱出することができたかといふ小林秀雄の体験の、次の中村光夫との対談での自註といふべき発言の先取りです。やはり、東京が首都であるといふ、日本が近代ヨーロッパの国家を真似てとりあへず明治維新以来に建国した大日本帝国と首都東京の不自然を、フランス文学の十九世紀後半の象徴詩に学んで文学的人生の出発をした此の批評家が指摘してゐる。同時に解決策も提示してゐる。首都東京が依然として日本の国の首都であるならば、大日本帝国もまた依然として日本の近代国家として日本国の後ろにあるのです。従ひ、この幻影のやうな幽霊のやうな日本の現在の国家を大祓ひに祓ふ為にも、私は、しかも上記の論点を問題として眺めてみると（要する



に自由と奴隷の問題と都会と自然の問題である)、私はやはり、天皇といふ存在が京都に遷都なさることが解決策だと此処でも考へ主張することになります。さて、前置きが長くなりましたが、都会と自然を巡る小林秀雄の発言です。出典は座談『文学と人生』(『新潮』昭和三十八年八月号)。座談の出席者は他に中村光夫と福田恒存のふたりの計三人のうちの中村・小林の対話部分です：

(福田恒存の発言である「たとえば『平家物語』を読んだり、歴史の本を読んだりしたときのような感動は、明治文学以来得られない。これはどういうことかな。」といふ発言を受けて、) 傍線は引用者：

中村 それと関係があるけれども、小林さんがランボーを読んで感動したというのは、フランス文学というものではないでしょう。

小林 全然ちがうんだ。勝手なものさ。しかしいま反省してみると、ランボオのイメージというものは、ボードレールには見つからなかったものだ。ボードレールのイメージよりも日本人に近いんだよ。そこに感動したんだ。きっとそうだと思うているよ。やはり日本の歌や俳句にあるイメージに近いものだ。ボードレールには関係ないけれども、ランボオにはあるんだよ。

中村 そうかもしれないね。

小林 自然があるんだよ、自然が。ボードレールにはそれが無いんだよ。それを僕はそのころはつきり意識しなかったけれども、いま振り返ってみると、ああそうだったなと思うんだ。あのころ僕にあつたランボーに対するいろいろの空想を、僕は青春の空想だと思つているよ。しかしその非常にリアルなイメージは僕の意識のなかに潜んでいる意識、僕の意識じゃない。やはり日本人としての民族的な意識と言ってもよい、そういうものとマッチした。物の象徴力の型とか発想とかのアナロジイの問題だがね。(略) 何というか、リアルというものだね。リアルなものという用語弊があるが、そのリアルなものに対する感覚を、日本人は日本人の詩で養ってきているんだな。日本の美術はリアルなものがないとだめなんだ。リアルなものから生まれなければだめだというのが日本人にはあるんだな。」

江藤淳は『批評文学の百年』(『新潮』1995年7月号臨時増刊号「新潮名作選・百年の文学」70ページから79ページ)の中で、上記の引用の後に小林秀雄の次の発言を引用してゐる：





福田　そうですね。さっきの経験とかこの意識が文化をつくる、今の若い人にはそういう意識があまりなさすぎるということで、小林さん、そういう場合、若い人にどういうことをすすめますか。

小林　もっと意識的になってほしいんだね。いまの若い人は非常に意識的なんだけれど、一面的にばかり意識が働く。もっと奥に暗黒なものがあるんだ。それをもっと見てほしいなあ。」（同書97ページ）（原文は傍線は傍点）

話が横道に入るが、この発言に対する江藤淳の感想は次のやうなものです。江藤淳も引用してある、小林秀雄の云ふ「もっと奥に暗黒なるもの」については、私の経験した事実のままに後述します。

「この座談が掲載されたのは、昭和三十八年（1963）八月号だから、そのときもまだ私はプリンストンにいた。その当時、「今の若い人」の一人だった私は、現在還暦を過ぎて、漸く「もっと奥に暗黒なものがある」ことを感じはじめている。そして、それが「リアルなもの」とどこかでつながっている手触りを覚えはじめている。

いうまでもなく、「実用文」によって、この「暗黒なもの」を描き出せるはずがない。「リアル」な「韻致」〔引用者：これは美文調の小説『金色夜叉』を書いた尾崎紅葉の言葉である〕を含んだ文学の言葉によってしか測鉛を下すことはできないのである。」

江藤淳の此の『批評文学の百年』からの上記の引用だけでも日本の文学にとって非常に重要な発言が含まれてあります。それは、

1. 実用文か美文（藝術的文章）か
2. リアルなものである生活感覚をどう文学の言葉で表すか

この江藤淳の整理した二つの指摘事項は、そのまま私の別途『文章読本論』で論じてある主題そのものです（もぐら通信第137号以降連載）。即ち、上記1と2の問題は、坪内逍遙の『小説神髓』と谷崎潤一郎以下の昭和の作家たちの著した一連の「文章読本」の主題そのものです。即ち、江藤淳の発言の此の時点1995年・平成7年の時点で依然として日本語の文章の問題は小説家および批評の両方から見ても上記二つの問題の解決をみてゐない。そして、私たちは二十一世紀の今も未だ此の問題を解決してゐない。ゐないどころか、日本語の語彙の選別と選択は益々乱れ（これが俗にいふ「日本語の乱れ」といふこと）、文体・様式・style・スタイルの確立からは遥かに遠い、文学と生活の現状です。これが今の作家に時代の要求してゐる問題解決のための課題である。

何故小林秀雄の閉じ込められてみたボードレールの球体をランボーの詩文が打ち壊してくれたかといふ理由を、次のやうに述べたことは正しかった：

小林秀雄「のランボー論は「過去を務めて再建してみたまでだ。」と言つてみるやうに、この一行を書くことのできた小林秀雄は既に〔その球体から〕抜け出すことができたので、そのことが言葉になつた。その脱出の契機をランボーが与へてくれた。ランボーは若くして詩を捨てて、アフリカ大陸で商人になつて一生を終えたといふ人生と文学に関する断念と諦念の在り方が、この恐らくは詩人の詩の言葉の中に既にあつて、この力が小林秀雄を狂気から救つてくれたのだと私は思ふ。」

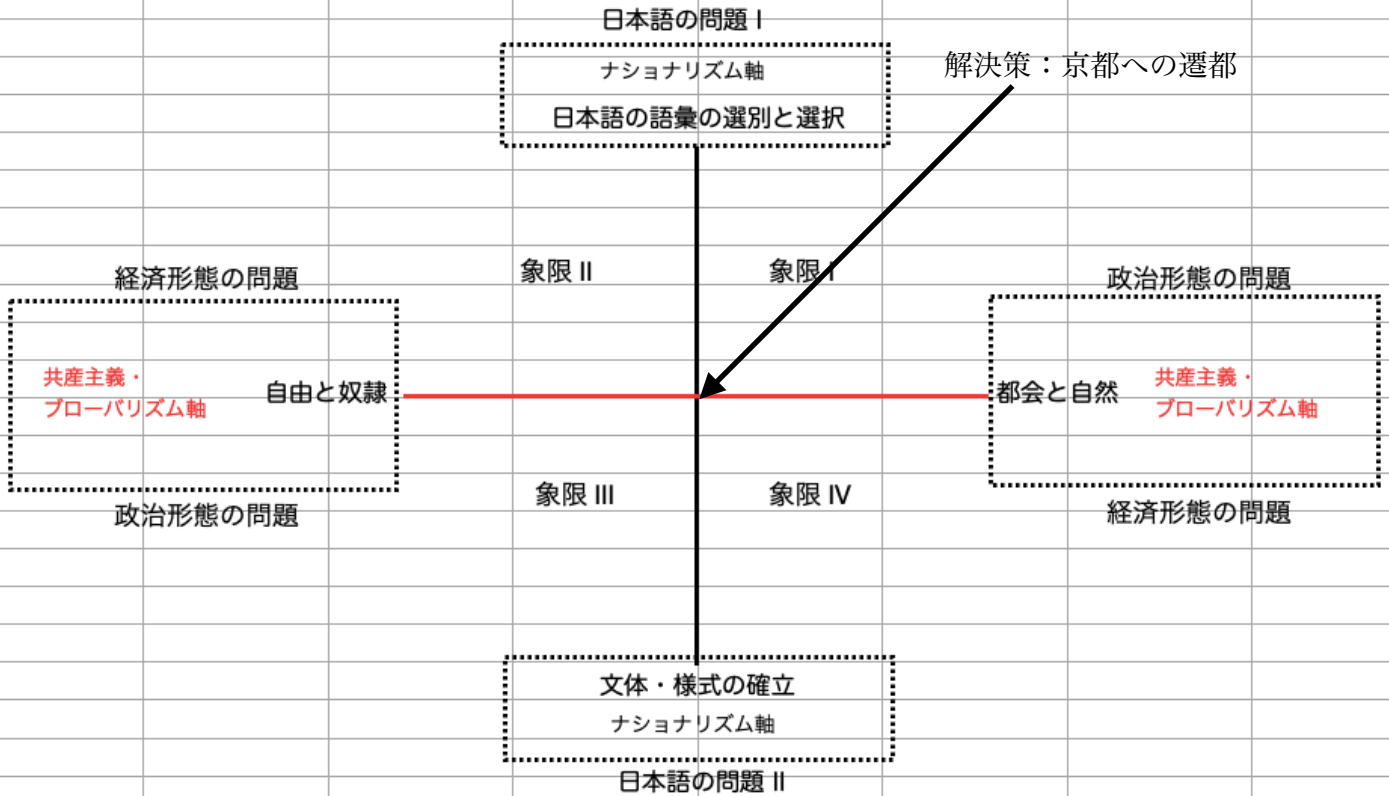
要するに「アフリカ大陸で商人になつて一生を終えた」とは、ランボーはパリといふ都会で作るボードレールのやうな詩文を捨てて、自然の中に生きる人生を選択したといふことを、ランボー論でも、この座談でも小林秀雄は言つてゐるのです。この批評家の言葉を借りれば、私的な意識ではない「日本人としての民族的な意識」や「物の象徴力の型とか発想とかのアナロジイの問題」が現下の私たちの問題であるといふことなのです。この国家や民族や社会やらのそれぞれの面で現れるこれら言葉の問題が現下の私たちの問題である。これを職業的な作家である谷崎や菊池寛以下の面々は歴代、日本語の語彙の選別と選択及び様式・文体の問題として認識して来たといふこと。この二つのことが、小林秀雄の発言と作家たちの書いた文章読本のことを併せると、今私たちの直面してゐる問題が整理されてよく解ります。

結局、ここで良く整理された私たちの世界史的な観点から国家と言葉の問題である「日本語の語彙の選別と選択」及び「文体・様式の確立」を超越論または縄文思想によつて解決するためには、「1. 自由と奴隷」及び「2. 都会と自然」の象限にある問題として論ずればよいといふことです。以下、座標として此の問題の関係を示します。結果として、この座標をみると、横軸はグローバリズムと欧米流近代化の軸、縦軸はナショナリズムの軸となつてゐることに注意を払はれたい。この座標上に起きる全ての問題を一挙に解決するのが京都遷都です。東京はただの政治都市に戻れば良いのだ。商業都市は自づと大阪にも戻つて来て、日本全体として分散するといふよい効果が生まれる。政治と経済療法の一極集中が自づと回避されるといふことです。この遷都は日本語の文章にも大きな影響を将来に亘つて及ぼすこととせう。



2021/09/18  
eiya iwata

日本の世界史的立場座標



私は学生で、これも二十歳のころで、ある天気の良い日に大学の界限を歩いてみた。進行方向に対して左は自動車道で、私は相対的に右の舗道を歩いてみた時に突然、全身に猛烈な重圧が天全体から掛かって来た。空気がみな重い物質になって私の全身を包んでのしかかって来た。うまい言葉が見つからない。あるひは、私が地上を歩いてみると突然、海の深い底に沈没して、海水の全圧力を海底で受けてゐるやうな重圧でした。歩きながら、これは拙（まず）いと思つたのは、四肢の関節の骨がギシギシと音を立て始め、また骨によつては、鎖骨であるか肩甲骨であるか、ミリミリといふ音も聞こえ始めた。このまま行くと、あと数歩数メートル歩きながら、私は骨が碎けて行つて、いはば肉塊になりながら舗道に崩れ落ちてしまふだらうと心配し、数歩先での死を覚悟して進むと突然全身の圧倒的な重圧がふと消えてしまつた。今でも、あの圧力は一体何であつたのかと思ふのである。関節の骨がギシギシ鳴る音やミリミリと立てる他の部位の骨の音は今でも耳朶（じだ）に残つてゐる。何故こんなことが起きたのか。この時、私は毎日毎時毎分毎秒、時間の外部へ出ることを考へてみた。考へるのみならず、実際に出ようとしてゐた。私は物理学者ではないの





で、頭の中だけで理屈を考へれば済むといふものではなかつた。文学・者は認識者であるだけでは足りない。行為と行動が必要だ。何故ならば、言語は万民のものだからであり、これは日々の時間の内部での人の営みに関する言葉のことであり、生きてゐること即ち命に関はることだからです。だから、私の骨が悲鳴をあげたのだ。多分この時、私は時間の外部へといつの間にか（超越論）出てゐたのだと思ふ。だから昼間の舗道を歩いてみて、光の世界の「もっと奥に暗黒なるもの」として存在する何かの中に突然（超越論）次元を超えてそのまま歩いて入つたのだ。そして、しかし、とは云へ、物理学でアインシュタインが十代でおこなつた時間に関する思考実験の例は、私の時間を超越する努力の説明に応用できるので、アインシュタインの思考実験の枠組みを借りて、私の思考実験の御話をします。超越論の話です

アインシュタインの思考実験はかうでした。同じ速度で並行して走る二両の列車の一方から他方を見て、後者の車両の中でボールを落下させると、そのボールはどのやうに落下して見えるか、また相手の列車よりも速度を上げて、自分のゐる列車から眺めると其の列車はどのやうに見えるか、そしてまた二つの列車が同じ光速度で走つたらお互ひにどう見えるか、そして私の思考実験は遂に、私が光速度以上の速度で走つたら、相手の列車はどのやうに見えるのか、また私はどうなるのか、といふことを考へた。実際に毎日工夫したことは、一番最後の場合で私が光の速度以上の速度で走ることであつた。今思ふと、何故ならば、時間の速度は、目に見える世界を生み出す光速度であるからです。それは、ほとんど毎日このことを言葉にはしないで、意識上と無意識下の両方の階層で（もしこれらが階層をなしてゐたら）、即ち意識の中と外に私がゐて毎瞬毎瞬の時間の速度を超えて意識を走らせる目に見えないmobilityで私があり続ける努力であり、いつて見れば何処にゐても何時でも念仏か、さうでなければ意味不明の呪文を心の中で絶えず唱へてゐるやうなものであつた。時間の最大の速度とは光の速度ですから、光の速度以上に速い速度で走ることは、時間の外部に出ると其処は闇であり、小林秀雄の云ふ暗黒であるといふことになります。時間の外部は、かうして、暗黒であり、暗闇であり、夜である。そして、そこには光はないので光の速度はなく、従ひ、どんな時間も存在しない。それが夜の意味であり、「もっと奥に暗黒なものがある」といふ其の暗黒である。従ひ、かうなる。

光の速度の内側でまたは其の速度未満で互ひに異なる速度で走る二つの物のうち、より速い方からより遅い方を眺めれば、それは遅い方は速い方より遅延してゐる。しかし、遅い方から速い方を眺めても、やはり速い方は（遅い方に対して）変ないひ方であるが、速く遅延してゐる。従ひ、遅延には相対的な速度

の問題としては、二種類ある。一つは遅い遅延であり、もう一つは速い遅延である。遅延の遅といふ漢字の文字が悪さをしてゐて、私たちの思考の邪魔をしてゐるわけなので、要するに、時間的に相対的な差異が此処に存在してゐるといふ以外にはないのであるが、しかし、更に物の速度を上げて、私が光速より速く走つたら、光の速度にある物がどのやうに見えるかといへば、私は光に照り生えてゐる此の（普通は）世界と呼ばれる世界の「もっと奥にある暗黒なもの」（小林秀雄の語構成を入れ替へて以後このやうにいふとすると、これ）の中にて、即ち、時間の外部にゐる。そこは時間の存在しない夜なのであり、時間と時間の隙間、即ち時間的差異、即ち遅延に存在する（時間の存在しない）存在なのである。

四肢の関節がギシギシと鳴り、鎖骨がミリミリと悲鳴を上げながら、私は存在になつた。昼間の舗道を歩きながら其の空間的差異の中で、即ち空間といふ隙間に存在する（私と云ふ）存在から観れば、絶えず且つ光と闇の時間の隙間にも身を置き続けなければならず、この二つの隙間、即ち時間と空間の交差点で二つのそれぞれの非連続の中で私の関節が音を立てたといふことになります。舗道を歩きながら、時間的差異の中では、私は昼間の世界にゐながら同時に光の隙間、即ち夜の世界にもゐることになつて、文字通りに身を引き裂かれることになつてゐた。しかし、人は何故平気で昼間の時間に生きてゐられるのであらうか。同時に（同時にとは何か？）其処は夜であるといふのに。要すれば、昼と夜、光と闇とは、丁度映画の映写機がフィルムを高速度で走らせながら、銀幕の上には昼間の世界を映写してゐるだけであるかのやうに、激しく明滅を繰り返してゐるといふのと同じで、私の眼には、世界は映写の映すスクリーン（銀幕）の上の映像のやうに見えてゐるといふことである。そして、私の体は闇の中に没してゐて、即ち光速を超越した時間の外部の中にて、昼間の光の世界の明滅を、明滅だとは思はずに、時間も空間も何か連続したものとして観てゐる。しかし、私がさうならば、実はあなたもさうなのである。あなたもまた、『S・カルマ氏の犯罪』で最後のところでロール・パン氏が映写するスクリーンの映像を実は観てゐるのだといふことに、安部公房の読者としては気づくことになるのです。この非ユークリッド幾何学の世界を映写する映写機の映す世界の外部にゐても同じ、その世界の内部にゐても同じ。何故なら内部は外部であり、外部は内部であり、時間の中ではこの二つは絶えず等価交換され続けて変転止むことがないからである。私が上掲した一筆書きの渦巻の迷路を想ひ出してほしい。（物理学の世界でアインシュタインは此の現実を $e=mc^2$ と云ふ方程式で表した筈です）そして、これが私たちの現実と呼び、小林秀雄が言葉が他になくて「リアルなものといふと語弊があるが」と云ふリアリティのことなのであり、「そのリアルなものに対する感覚を、日本人は日本人の詩で養つてきてゐるんだな。」と云ふ其の現実感覚で、実は、あるのです。小林秀雄の続けて曰く「そのリアルなものがなければだめなんだ。リアルなものから



生まれなければだめだといふものが日本人にはあるんだな。」と云ふリアルなものが、このやうな日本人の現実感覚であり、これが時間とは遅延であると云ふ認識であれば、江戸時代の賀茂真淵が季節を単位として若いお弟子さんに四季の変化の隙間を見よ、この間の色を、即ち間色を見ることが大事だと書簡に書いた此の遅延の、時間的差異が、私たち日本人の太古・古代からの「リアルなもの」であるに間違ひないのです〔註●〕。私たちは季節の変化を愛でる。

〔註●〕

賀茂真淵の超越論については「I 国学の超越論：賀茂真淵と本居宣長の超越論」（『縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（15）』（もぐら通信第131号）の「5.16.4 八の音義は何を意味するか（4）」）にて詳述しました。

さあ、かくして、あなたは既に（超越論）そもそも（超越論）S・カルマ氏なのです。私は、安部公房が何故太宰治の次に二番目に宮澤賢治が好きであつたかが、かうしてよくわかります。あなたも宮澤賢治の処女詩集『春と修羅』の序文として置かれた詩の次の一節を読めば、宮澤賢治もまたS・カルマ氏だと知ることになるからです。引用します（傍線は引用者）：

わたくしといふ現象は  
 仮定された有機交流電燈の  
 ひとつの青い照明です  
 （あらゆる透明な幽霊の複合体）  
風景やみんなといっしょに  
せはしくせはしく明滅しながら  
いかにもたしかにともりつづける  
 因果交流電燈の  
 ひとつの青い照明です  
 （ひかりはたもち その電燈はうしなはれ）

この詩では、S・カルマ氏は「ひとつの青い照明」と呼ばれ、これが実は（あらゆる透明な幽霊の複合体）であるといはれるので、激しくせわしく明滅する青い光を放ち続けると見える電燈が、実は同様の何十億、何百億、何千億もの透明な眼に見えない存在としての《私》です。これが「せはしくせはしく明滅しながら/いかにもたしかにともりつづける/因果交流電燈の/ひとつの青い照明で」ある貴方です。しかし、あなたは寿命ある人であり、「その電燈はうしなはれ」ても、「ひかりはたもち」続けられる。宮澤賢治の春の修羅もまたS・

カルマ氏である、否、S・カルマ氏こそ「四月の気層のひかりの底を/唾（つばき）し/はぎしりゆききする/おれはひとりの修羅なのだ」（同詩集の詩「春と修羅（mental sketch modified）」。かくしてS・カルマ氏は球形をした一つの電燈である。その足を下ろした地面も球形である。アインシュタインは九歳の息子に「パパはどうしてそんなに有名なの」かと尋ねられて、かう答へた。

「カブト虫がフットボールの表面を這い回ったと考えてごらん。カブト虫には自分のたどった道筋が曲がっているとは気がつかないだろう。でもお父さんは、うまい具合にそのことに気づいたんだよ」（『アインシュタイン・ロマン 1 黄泉の時空から 天才科学者の肖像』62ページ）

そして、存在の存在する此の夜が（球体の集合たる）自然のことだと考へて、日の沈んだあとの夜であるならば月といふ天体が出て、日の光を反射して夜を照らす、しかしもし自然の中ではなく、意識と無意識の世界だけでの話であるならば、そこには月は出ず、全くの暗黒だけの世界である。安部公房の経験した私と同じ経験を20歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』から引用します。否、この自然と人間を分け、自然と意識を分ける考へ方そのものが、近代ヨーロッパの論理上の、旧約聖書の天地創造に基づく致命的な誤りであるので、このことを知つてゐる私たちはさうは考へずに、やはり自然の夜も意識上・意識下の夜も人間のこと故、自然の一部だと考へるのが正しい。何故なら唯一絶対神にも必ず外部があるからです。従ひ、神々も含んだ自然には昼も夜も等価で、在る。最初にあるのは天地（あめつち）であつて、存在の明滅は此の垂直方向の落差・差異に常に時間の中で存在してゐる。と、かう考へた上で、次の引用をお読みください。私たちが安部公房の読者であると云ふことが、如何に幸せなことであるか。安部公房の部屋に夜が浸潤して来る。

「夜は決して理性の作品ではない。又体験から割り出されたものでもない。体験自体なのである。夜はまねかれた客人ではない。夜は此の部屋に満ちる空気である [引用者：部屋とは天井と床の間であり壁と壁の隙間即ち空間である]。総てをかくあらしめるもの、それが夜である。此の吾等の判断も、表現も、生も、行為も、幻想も、総てそれがあつた如くあらしめるもの、それが夜なのである [引用者：ここまで読むと夜が（時間の存在しない）存在であることが判る]。解釈学的体験……次の数行の余白はその無言の言葉で埋められるのだ。（私は君達の自己体験をねがふ為に此の余白を用意したのだ）

.....  
 .....  
 .....



そして人間の在り方は正に此の数行の余白によつて明確に示されるのだ。夜はかくあらしめるものであつた [引用者：ここまで読むと余白であり此の三つの始点の位置に差異を設けられた点線とは存在のことであり、従ひ夜のことであることが判る。これが余白の意味である]。』（『詩と詩人（意識と無意識）』全集第1巻、112ページ下段）

これが、安部公房文学の本質です。私が安部公房が上に述べた夜と云ふ隙間又は沈黙の余白、即ち存在、即ち差異、即ち光と光の隙間（何故なら光は粒子といふ非連続量でもあるから）に墜落した話をしよう。それは突然起きた。いつどこであつたかはもはや記憶にない。真っ暗な暗闇の中、小林秀雄のいつた昼間の現実の「「もっと奥にある暗黒なるもの」の中に突然、前触れもなく私は落ちて行つた。これは安部公房が恋人山口果林に語つた通りの体験で、全くブラック・ホールに吸ひ込まれるやうな争（あらが）ふ術（すべ）のない絶望的な墜落の経験であつた。この絶望的な失墜感には底がなかつた。これまで、私は二度この夜から脱出しようとしたが果たせなかつた。（安部公房は山口果林に「君は、僕の足もとを照らしてくれる光なんだ」といつてゐるのは修辞ではなく、事実を述べてゐるのです。）そして夜には、夜であるが故に、方向もない。価値は等価で遍在するとは、かういふ意味です。それにまた入口がない以上出口もないのです。突然（超越論）起きたといふ意味はさういふ意味です。と云ふことは、夜もまた球体の姿をしてゐるに違ひない。18歳のトーマス・マンの球体は円錐形の光の中に浮いてゐた。この球体は夜であるか。出口もなく入り口もないとすれば、やはり夜であり存在である球体の内部には時間は存在せず、価値が等価で遍在する沈黙と余白の世界だけがあるのだ。これが「シャボン玉の皮」の内部のことです。つまり、安部公房の汎神論的存在論の記号を使つて表記すれば、私は《箱男》になつたのである。そして今も箱男といふわけです。否、S・カルマ氏と呼び替へることにしませう。さうして《わたし》は此の光の円錐形の外部に、即ち夜の闇の中にあつて依然として光の円錐形を眺めてゐる。光の円錐形の中にあつて私の名前を呼ぶ人たちは、存在として夜の暗黒に存在する（といふ此のやうな再帰的な存在としての）私を知ることがない。この文章を読んで知つたとしても何をどうしやうもない。さうして、《わたし》は映写されて明滅してゐる映画の画面のやうな世界を闇の中にあつて眺めてゐるのである。

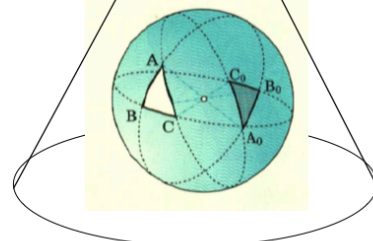
2021/08/26  
eiya iwata

トーマス・マンの光の円錐形

ここに光源がある



トーマス・マンは此の円錐形の外部、即ち闇の中にあつて、この三次元の形象を眺めてゐる





アインシュタインが相対性理論で世界的に有名になつて世界旅行をして各国を訪れて、「何といつてもアインシュタイン・フィーバーが激しかったのはアメリカだった。一九三〇年から一九三三年にかけてのアインシュタインのアメリカ訪問の時期にはピークとなる。」（前記『アインシュタイン・ロマン』78ページ）この原因を考へると、これまでアメリカ文化の贗物性を論じて来た私にはよくわかります。映画といふアメリカ大陸の西海岸で生まれたハリウッドの一大産業の製作するmotion picture又はmovieといふ名前は、さう呼んだアメリカ人の思つてゐた以上にアメリカ人の贗の哲学の体現だつた。即ち、ヨーロッパの鬼子であるアメリカ人が、自分の人生を考へるための映画館といふ倉庫のやうに巨大な闇の夜の空間が、超越論的哲学性を隠した映像をスクリーンに映写してくれてゐるからです。一枚一枚四辺形に、少しづつズラした絵を描いて重ねて後でパラパラと連続的に捲（めく）ると静止画像が動画となつて連続的に時間の中で恰も命あるかの如くに（animation）活動するわけであり、これが映画の原型ですから、要するに、非連続的な空間があつて初めて時間連続的な映画の映像が生まれるといふ此れは世界であり、哲学を欠いたアメリカ文化の中で哲学を隠した、それもアメリカ人らしく娯楽としての贗の現実である。この映画といふものの持つ特性と映画館といふ巨大倉庫空間の故に、アメリカ人にとっては映画館で映画を観ることは安心できることになるのです。私の観るところ、アメリカ人は野球の選手であれ、これから銃をもつて突撃するFBIの連邦捜査官であれ、緊張して不安になる時には安心するためにチューイン・ガムを噛んで敵に対するのであり、対して此のやうに映画を考察すれば、不安になることなく安心して恋人や家族と一緒に映画を観る時にはポップ・コーンを食べるのである。

何故映画を観る時に殊にポップ・コーン、それもあれだけ大量の、大きな紙の器に入れたポップ・コーンでなければならぬのであろうか。一つ目の理由は、アメリカで大衆化し、従ひ通俗化したフロイトの精神分析理論を適用すれば（アメリカでは何でもかんでも大衆化する）、アメリカ人の精神が口唇期にゐるからです〔註●〕。あるひはmind・心とか思ひといふ方が良いかも知れない。

〔註●〕

Weblio辞書より：

「こうしん-き【口唇期】

精神分析用語。小児性欲の発達的第一段階。乳首などを吸う行為によって、その刺激で口唇に快感を得ている、生後18か月ぐらいまでの時期。」

(<https://www.weblio.jp/content/口唇期>)

余程、アメリカ人の心理の根底には無意識裡に、私たちはinnocentだ、子供のやうに純粹無垢な人間だといふ盲目的な心理があり、法律論としては私たちは子供のやうに純粹無垢だから一切罪など犯す事なくinnocent即ち無罪だといふ盲目的な思ひ込みがあるのです。逆にいへば、それだけ純真でも純潔でもなく、深い罪の意識があるといふことです。だからアメリカは宗教国家であるといふことがよく判ります。このやうな人間を赦す存在は唯一絶対神だけであるからです。しかしまた此のことで、アメリカ建国の国家の根拠と白色人種の人間個人の此の心理的弱点を極左・共産主義者たちに攻撃されて今アメリカは内戦状態になつてゐる。映画館でポップ・コーンを絶えず食べ続けるほどに、口唇が淋しいのです。だから宗主国のイギリス人に比較しても、日常的に頻繁にキスをして口唇期の不安を消さうとする。従ひ、アメリカ人が日常的に口にするI love youといふ科白は、相手も自分をも安心させるための御呪（まじな）ひであり、呪文なのです。日本語で云ふならば、口がさみしいと云ふ人間がアメリカ人であるのです。この安心の場所が、闇と光の明滅する場所即ち映画館なのです。U.S.Aといふ人工国家のアメリカ人は、やはり人工的であるにせよ、映画館で物質的に宇宙の真理に触れて安心する。これはこれでまた別に稿を分けてアメリカ文化贗物論を論ずることができる。

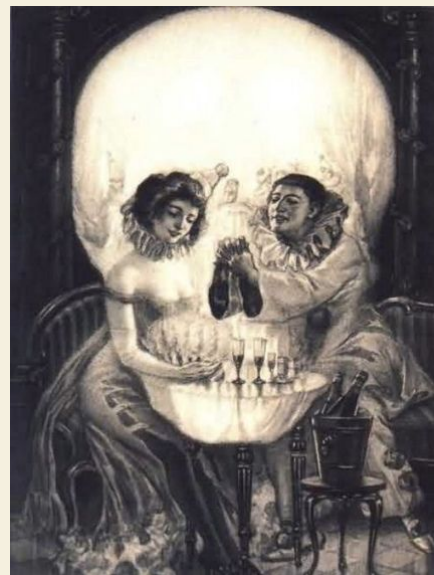
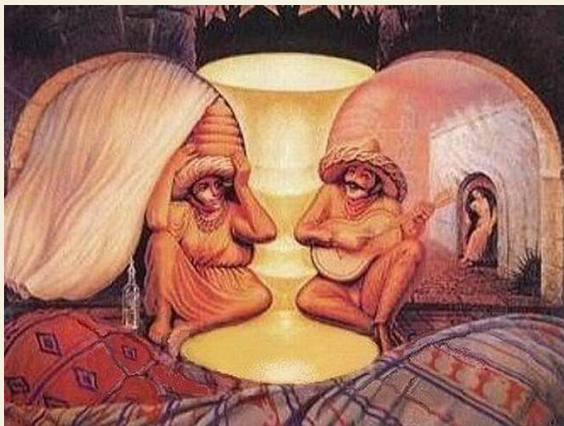
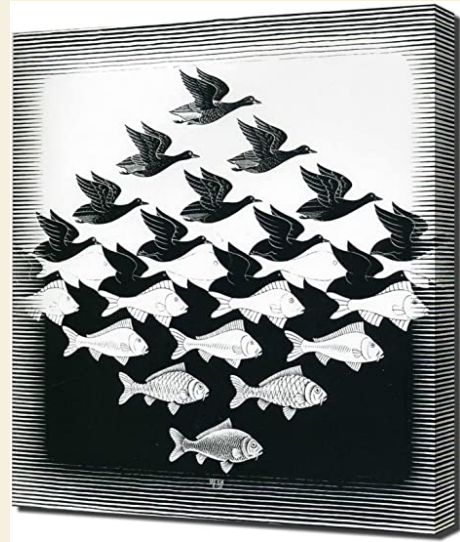
安部公房の読者として突然、しかし以上の述べたことと同じ線上で又延長上に、シュールレアリスムの絵画の例を幾つか示します。この藝術上の運動が、言語論として又修辞学の問題としては、この運動は隠喩（メタファ）で表現する運動であつたといふことは『リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（29）第2部 III ~安部公房をより深く理解するために~』（もぐら通信第85号）で論じた通りです〔註●〕。これらシュールレアリスムの絵画の中のいづれの半分が夜でいづれの半分が昼であるとするかは、あなたの自由です。何故なら、世界は差異であり、この差異はあなたの中の《わたし》の認識によるからです。

## 〔註●〕

『リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（29）第2部 III ~安部公房をより深く理解するために~』（もぐら通信第85号）より同箇所を引用します：

「今思ふと、第二次大戦後のヨーロッパで流行したシュールレアリスムは、アンドレ・ブルトンの『シュールレアリスム宣言』を読みますと、隠喩（メタファ）で物事を表現する運動でありましたから、一神教のtopologyの配下にある民主主義、資本主義、マルクス主義を否定し、これらに反対するものでした。しかし、同じ一神教のtopologyであるにも拘らず、即ち同じ穴の貉であるにも拘らず、マルクス主義が前二者を貨幣の存在の肯定否定を基準にしてこれらの制度を否定してみせましたから、マルクス主義といふ共産主義と結ぶことがあつたのでせう。」





次に、私たちの超越論としての縄文思想から観て、カントの哲学用語を日本語で整理します。近代哲学で超越論といふ言葉は、カントが主要な哲学思潮の最初に使ったからです。さうして、カントのいふ「時間と空間は直観の形式である」といふ考へが間違ひであることを解説します。何故なら、これはあなたも既にご理解の通り、時間と空間は言葉で説明の不可能な言語「以前」の直観の形式ではなく、差異に関する世界認識の形式である（と三島由紀夫なら云ふだらう）からです。いずれにせよ、この問題は、カントがどのやうに直観といふ概念を定義したかによります。このことを、ソクラテスに倣つて、吟味したい。悟性、理性、認識、時間、空間、見ると観る、五つの感覚、判断といふ基本用語についての理解を、私たちは得る事になるでせう。





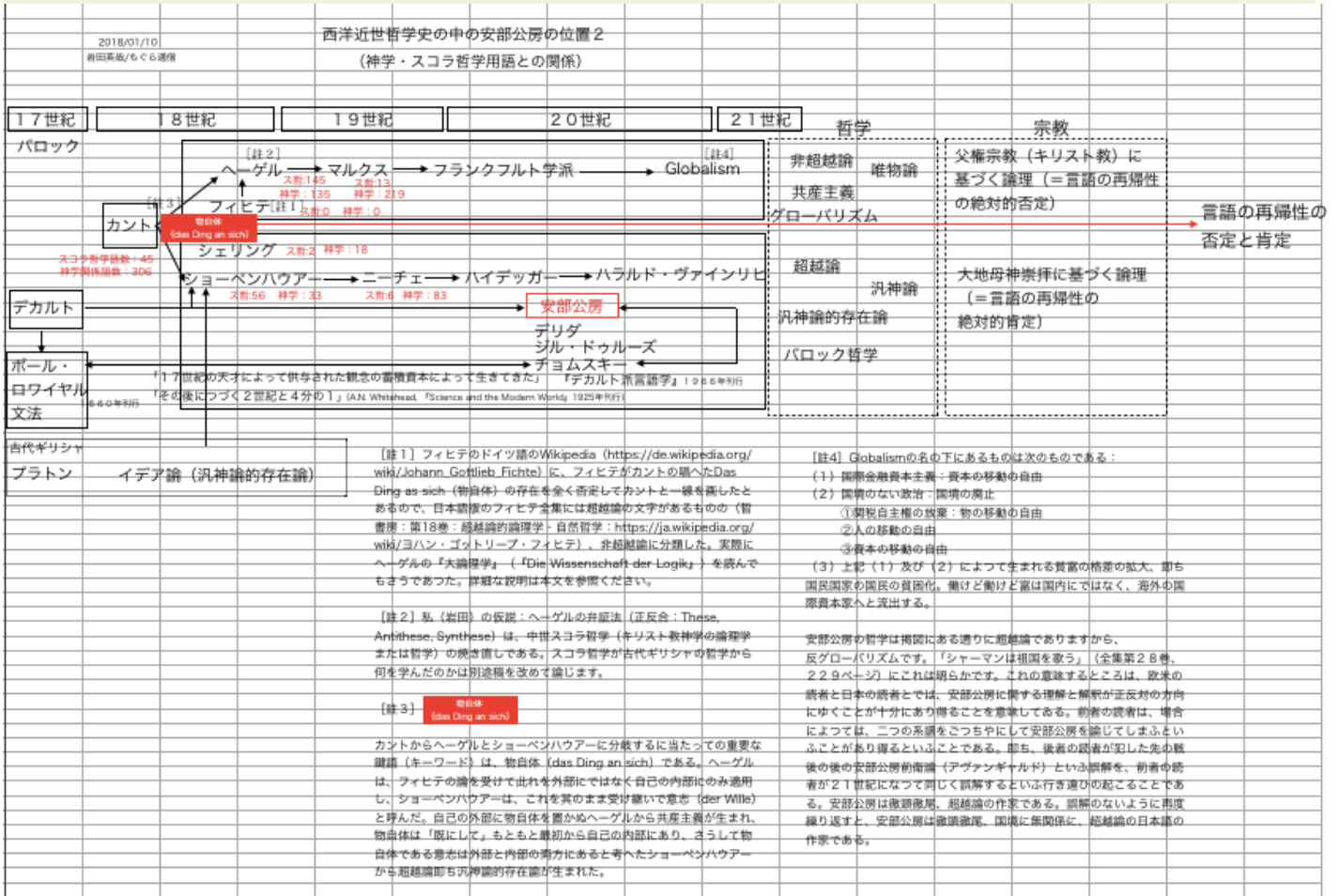
さうすれば、私たちは、よく理解できなかつた近代ヨーロッパの社会をより良く理解できるでせう。何故なら、哲学の用語の定義に従ひ、これ以下の社会の階層にある法律用語、経済用語、政治用語が、この定義された言葉の上に成り立つてゐるからです。日本には、日本語で、この仕事をした明治以降の哲学者はみなかつた。やはり、二十一世紀初頭に立つて、この意義に於いても、私たちは日本の太古・古代以来の伝統的哲学または形而上学の伝統に戻るべき時です。そのための次の章です。

といふことで、ここまで書いて来て、次章の準備のためと思つて此処でカントの『純粹理性批判』(Kritik der reinen Vernunft/クリティーク・デア・ライネン・フェアヌフト)を読み始めましたが、直ちに気づいたことは、この批判書は私たちの役には立たないといふことです。何故ならば、空間を絶対的な空間と呼んでゐるからです。他方、私たちの世界では、空間は幾つも幾つもあり、そして等価交換されて変形しますし、幾つも同時並行的に其のやうな空間はあるわけで(以上、コト・タマ理論または御タマ理論による)、このカントの哲学はニュートンの物理学に対応した哲学での理論書に留まるからです。要するに古くて役に立たない。私たちの哲学は太古・古代以来の汎神論的存在論なのであり、しかし、これに対応するアインシュタインの物理学はやつと20世紀初頭になつてヨーロッパ地域で生まれ。とすれば、その後継の物理学の宇宙観に対応してある哲学の系譜で、私たちが折に触れて参照すべきは、カントーショーペンハウアーーニーチェーハイデガーー以降の生命の哲学の系譜の哲学者たちです。フィヒターヘーゲルー以降の共産主義思想は主意・主我的でありロマン主義的であり過ぎて論理性を欠き、私たち日本人の哲学とは全く相容れませんので、建設的・生産的な思想的材料にはなりません。この材料にはならないといふもつと正確な理由をいふと、共産主義の系譜の思想は皆言語の固有に持つ再帰性を絶対的に否定するからであり、他方、生命の哲学と呼ばれる系譜の哲学者たちの論理は言語の固有に持つ再帰性を絶対的に肯定するからです。これについては『安部公房とチョムスキー』の「2. 西洋近世哲学史の中の安部公房の位置」で詳細に論じました(もぐら通信第73号)

[註●]

[註●]

「2. 西洋近世哲学史の中の安部公房の位置」(『安部公房とチョムスキー』(もぐら通信第73号)の分類により仕分けると次のやうになります。判定の規準は『西洋近世哲学史の中の安部公房の位置2』と題した図です。ダウンロードは：<https://docdro.id/GLaIAIk>



さて、それでは、時間といふ概念をカントは如何に定義してあるかといひますと、時間に対して絶対的なものは、絶対的な現実であつて、この私たちの五感を通じて知る現実の中にある時間といふものだけを時間と呼んでゐます。そして、時間に対しても現実も絶対的空間と呼ばれてゐますので、現実も絶対的、空間も絶対的であれば、時間も絶対的なのであつて、実際カントは時間もまた絶対的なものだと書いてゐる。即ち、カントは現実—空間—時間の関係を絶対的な関係であり、相対的な関係であるとは考へてゐない。従つて、これらの三つをそれらの関係と共に認識し(理性の働き)または理解する(悟性の働き)ようにと感覚を通じて働かせる力を直観と呼んでゐるのです。そして、それ故に、ここから理性にもあり悟性にもある直観能力とは別に、悟性能力と認識能力とは別の直観、別であるが故に純粹の形容を冠した純粹直観といふものがあるのだと云ひ、この理性と悟性とも無関係な直観能力が空間と時間を認識するのだといふのです。そして、その空間と時間には様々な対象が感覚を通じて現実になり、これが絶対的現実である。そして、理性と悟性の両方に判断能力がある。判断といふ能力に、カントは理性と悟性の区別をしてゐない。今ここでは、シューベンハウアーがカントを引き継いで論じてゐる人間の意志の問題には触れません。





さて、このような文脈にあつて、このやうにカントは空間と時間は直観の形式だといふのです。そしてこれが何故間違ひであるか。何故なら私たちの現実**は絶対的なものではなく相対的なものであるから**だといふ事は、この論考でも『縄文紀元論』その他諸処にては安部公房論の非ユークリッド幾何学の世界のこととして縷々述べて来た通りです。時間も空間も差異として私たちは直観するのではなく、差異であるが故に認識することができる。

さて、最後にここまで来て、私たちの超越論または縄文思想とカント哲学との関係を補足的に説明をしますと、アインシュタインの相対性理論がニュートンの力学を其の特殊な場合として其の内に一部として含むのと同じやうに、私たちの数ある空間と時間の関係を或る任意の空間と時間を絶対的な関係であると決めて論ずれば、私たちの超越的空間・時間論はカントの哲学をその特殊な一部として既に（超越論）最初からそもそも（超越論）含んでゐると云ふことになります。しかし、このやうに考へると、空間と時間からなる世界にも常に外部があるわけですから、もしこの関係を絶対的なものだと固定して考へてしまふと、物を認識することの外部を、何々自体の存在の説明をするために求めざるを得なくなつて（この思考の順序は本末転倒である）、何か此れもまた絶対的に物自体が存在するといふ（無い）物事についての（有ると云ふ）誤解を避けることができなくなるのです。絶対的な物自体などは、ない。何故ならば、安部公房の読者であるあなたには自明である通りに、人間には人間そつくりがあり、S・カルマ氏にはS・カルマ氏そつくりがあるやうに、何々自体は何々そつくりが相対的に存在してゐて初めてあり得る概念だからです。即ち、物自体は、物そつくりがなければあり得ない。「幽霊はここにゐる」からです。それならば、カントのいふ絶対的現実といふ現実**は贗物であつて、かう考へることで贗の現実自体である本物の現実が現実といふ物自体としてあるのではないのか**（どうか頭を混乱させないでほしいーヘーゲルの文章はこんな理屈の羅列ですー）。幽霊にあると云ふ（存在しない）正体など認識できるわけがないのです。正体見たり「無い枯れ尾花」である。『バベルの塔の狸』の主人公アンテン君ではないが、「とらぬ狸」の皮算用である。《箱男》の話ならば、贗医者があるて初めて医者自体が本物の医者と呼ばれて存在し、贗箱男があるて初めて小説冒頭の箱男が本物の箱男になる（変形する）といふのと同じです。しかし、カントの時代には彼の地にては非ユークリッド幾何学は生まれてゐなかつた。それにしても、リルケは素晴らしい。日本語で次の一行を引き写します。リルケはこのことをたつた一行で歌つてゐます。カントもリルケを読んでゐれば位相幾何学的な等価交換の世界に触れて、考へ方を変へたに違ひないのです。しかし、如何せん、カントは18世紀の人、リルケは19世紀後半に生まれて20世紀初頭までを生きました人です。やつとリルケやトーマス・マンの生まれた（二人とも1975年の生まれ）此の頃に、ヨーロッパ地域で遅まきながらtopologyが生まれた。リルケの世界の差異の値を0にする等価交換の詩の一行：

最も遠いものは最も近く、最も近いものは最も遠い



『マルテの手記』の最後を想ひ出してもらひたい。私たちならば、同じことを、もののあはれと一言でいふでせう。

最後に三度目の正直で至つた普遍言語・宇宙モデルを提示します。この宇宙の生成する契機となる規則を、私は唯一の普遍言語規則と呼んでゐる。唯一の普遍言語規則から数々の宇宙が生まれる。この唯一の此の世界生成の規則（従ひ、これを本当には宇宙原理と呼ぶべきでせう）の片葉が〔世界は差異である〕、片葉が〔価値は等価で遍在する〕。このモデルをよりよく理解してもらふために私の予備的なお喋りが次回までに再生まれたら、これはまた此れで御勘弁。

(次号に続く)



## サンチョ・パンサを求めて

(16)

## コンピュータ時代にはどんな人間が強いのか

(1)

岩田英哉

『コンピュータ時代にはどんな人間が強いのか』（全集第22巻、292ページ）が昨今の問題と課題に直接触れてゐるので、ここでとりあげたい。

安部公房とコンピュータといへば、最初に連想するのがSFの傑作『第四間氷期』（1958年）です。標記の対談は、東京電力の当時の社長との対談で、対談での発言を読みますと、この木田川さんといふ方は明治三十二年八月、福島県の生まれであると、インタヴューアによる註釈的な履歴紹介があります。やはり旧制高校の教育は、今の教育に比べて素晴らしい成果を上げてゐる。安部公房も其の恩恵に浴した一人ですが、この経営者は何よりも抽象用語を相当自由に、経営者の立場から、コンピュータとの関係で使ひこなしてゐます。

さて、この対談は1969年に行はれたものですから、『第四間氷期』の発表からおよそ十年近くが経つてゐる。時代は高度経済成長期の1960年代の最後の年で、しかし安部公房が此の小説を書いた頃は一人娘のねりさん曰く「まだコンピューターが実験段階だったころ、父はパーティーで大きな会社の社長達をまわって、「きみたちコンピューターは科学者のおもちゃだと思っているだろう。ところが君たちの会社はこれがなければ一日もやっていけなくなるんだ」（『安部公房伝』199ページから200ページ）と、かう言つてゐたことが、この経済成長期にはすつかり現実のものとなつてゐて、こんな大会社の社長との対談が実現する時代になつた。

1969年といふ此の年の安部公房と三島由紀夫の姿を黛敏郎は次のやうに書いてゐる。若い読者には、この時代の雰囲気を知つてもらひたい。キャンティとは今も六本木に店を構へる有名なイタリア料理の店です。このレストランは、安部公房の『リルケ』と題したエッセイに、六本木のあるレストランで友人と食事をしていたところ、その友人に促されて、隣の席にいた男がリルケの息子だと言われて、その老人を見て、笑いがとまらなくなったという四十歳頃の経験を書いてゐる当のレストランのことです（『リルケ』全集第21巻、436ページ）。『キャンティ物語』（野地秩嘉著。幻冬舎文庫）から引用します：



「「キャンティ」の常連の中でも長老格だった黛敏郎にその頃の店の空気を尋ねると、「六〇年代か」と、ふーっと息を吐き出し、少しの間考えて、そして話をはじめた。「真夜中が「キャンティ」の華やかな時間だった。がさつじゃない仲間達がいたから。その大元締めが川添氏でね〔引用者：店の経営者〕。

『キャンティ』のなかはゆったりしていたけど、外は物情騒然とした時代だね。六〇年代とは、ベトナム戦争やらロックミュージックやらで。いつだったか、六〇年代最後の年だったかな。三階の『キャンティシモ』へ行ったら、三島（由紀夫）さん〔註4〕、安部（公房）さん、堂本（尚郎）さんといった『ああ、あんな人が』と思うような人がゴージャスを踊っててねえ。しかし、あれはダンスが好きで踊ってたわけじゃない。時代の雰囲気にかかれて踊っていたんじゃないか————と、今になってみればそう思うね」

## 〔註4〕

三島由紀夫は、本当にこの店の常連でした。「同じ年（筆者註：1970年）の十一月二十五日、三島由紀夫は、盾の会のメンバー三人とともに、市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監部で割腹自殺。その一週間ほど前の夜、三島は「キャンティ」で松竹の永山と夕食を摂り、「永山、俺は芝居は一切書かない。手を引く。しかし、君は歌舞伎から手を離しちゃいけない」と言い残している。（同書、234ページ）」

（『レストランキャンティ（CHIANTI）と安部公房』（もぐら通信第28号）

以上が対談の舞台の背景とすれば、前景は次のやうなものです。結局今までの、この近代国家の政府と官僚は計画立案能力を必要とされて来たのではないか、といふことが私は云ひたい。これに対して、この対談の眼目は「コンピュータ時代にはどんな人間が強いのか」であつて、もし計画立案能力を今のコンピュータが人工知能と呼ばれる程度に高い能力を与えられると、一体人間は何を失ひ何を得るのかといふ問に対する答を安部公房がしてゐるのだと思つて、この対談を読むことが良いことだと思ふ。安部公房の予測には二つあり、安部公房らしいことに裏側から、逆の論理、即ち安部公房流に云へば「太陽を曇りガラスでみ」たコンピュータには解決できない問題を二つ挙げてゐます。

1. 翻訳
2. 問題提起

人間ならば、行き当たりばつたりの人生は決して褒められたものではないと何故か人は広く信じてゐるのに対して、計画的な人生は世間の殊に褒める人生のやうである。これによつて、保険会社、銀行、投資会社、証券会社などが、金





を儲ける根拠としてゐる。天津さへ、近代国家そのものが国民が計画的な人生を送ることを前提にして教育制度をつくり、能力判定をし、偏差値が高ければ高いほどあなたの人生は計画的になつて行つて、計算尽くめの素晴らしい人生になつて行く。これを、仮に此処で正しい人生と呼ぶことにしよう。

これに対して、もし犯罪者が計画的な犯罪を犯すと、これは国家によつて褒められるどころか、重罪の度合ひを増して、最高度の刑罰の判決が正しい人生を送つて来た裁判官の前では死刑を宣告されるといふのは、一体どういふことであらうか。行き当たりばつたりの犯罪の方がまだ罪は軽くなのである。

まとめると、計画を巡つては、計画的な行為か無計画的な行為かのに分類があり、正しい人生の場合には前者は賞賛、後者は軽蔑となり、正しくない人生即ち不正な人生の場合には前者は重罪、後者は罪の軽減となるのは何故か。この場合の、正不正の判断基準は、法律に違反するか否かであり、前者の場合には計画性の有無が更に判断の基準となると解することができる。といふ事は、法律には計画的な私たちの人生が或る典型的な国民像として前提されて叙述されてゐることになります。しかし、此処まで考えると、私たち安部公房の読者には、こんな法律などは糞の役には立つが、何の役にも立たないのではないかと段々と思はれて来るのです。

上記1の翻訳については、既にGoogle翻訳といふサービスがネット上で無料で提供されてゐて、先日も日本語の文章のドイツ語訳を依頼されたので試しにGoogle翻訳を使つて見たら、ほとんど間違ひのない日本語訳を瞬時に（瞬時に、である）行つて見せてくれたのには驚いた。これで、私は従来翻訳者といふ職業を一つ失つたわけです。何しろドイツ語を知らなくても、ただ文章の複製をして翻訳画面に貼付すれば良いだけなのです。そして、翻訳プログラムが翻訳したドイツ語をまた複写してメールに貼付して私に依頼をすれば良いだけです。当然私の翻訳量はなくなり、私の仕事は一種の翻訳の質をチェックする翻訳品質マネジメントといふべきものに、嫌でも格上げになる。仕事の量は大いに減るが、対価は大きく増えるといふことになつて、私に後にも対談の主題の一つになる余暇が生まれると同時に、私の給料も上昇するのである

さて、さうすると、私の仕事は、コンピュータの仕事を管理監督する仕事に格上げになつた。と、かう考へるか、いや私は自分で翻訳するのが好きなので、これに執着するのだといふ翻訳家といふべき翻訳者がゐるとすれば、この人は間違ひなく職そのものを失ふどころか、既に失つてゐる。安部公房の予測を超えて、二十一世紀の初頭の電子計算ソフトウェア・プログラム（といふべきでせう）は、優れた商品になつてゐる。それも無料である。しかし、無料である



が故に、もし外務省の役人が職場でGoogle翻訳を使ったら、また企業の規模を問はずに私企業の設計開発の技術者がこれを使ったら、前者の外交的機密情報は直ちに此のアメリカ国籍の私企業に漏洩し、後者の技術的機密情報は直ちに同じ結果をもたらす。これはこれで、翻訳の問題は国家と私企業の安全保障の問題であるといふことになる。しかし、人間の手を離れて即座の自動翻訳が可能となつた今、この国家安全保障に關する翻訳は、人的な翻訳能力を超えてしまつたので、国家安全保障の弁（バルブ）にも障壁にもならないことになつた。同じ事は經濟の安全保障についても云へるでせう。

さて、二つ目は問題提起の能力がどこまでコンピュータが備へることができるかといふ問題です。私たちが幾ら計画を立てても、計画はその通りには行かない。お正月の一年の計とか、日記を始めたが三日坊主であるとかといふことが、その良い例です。必ず計画に逆らふ問題が現実に起きる。人間はこれを予測して予め策を立てたり（予防策）、事後に再発を防ぐ処置を施したり（防止策）することができるが、果たしてコンピュータにこんなことができるものか。問題を事前であれ事後であれ、予め予測して問題提起ができるものであるか。人間はこれができます。

この能力をめぐつて交はされる二人の対談の中見出しは次のものです

- 1。木田川氏による問題の提起
- 2。巨大化する組織と人間
- 3。人間頭脳とコンピュータ
- 4。問題の所在を明らかに
- 5。教師の給料を大幅アップ
- 6。近ごろの若いものは
- 7。フリーセックスと家庭
- 8。教育革命を断行せよ
- 9。レジャーと労働の結合

以下、上記各見出しについて二人の議論の論旨を明らかにして、現代の問題として論じたい。そのために、この順序を次の順序に組み換へます。付番はそのまゝに、アルファベットで順次を示します。

- a: 1。木田川氏による問題の提起  
b: 2。巨大化する組織と人間



- c: 3。人間頭脳とコンピュータ
- d: 4。問題の所在を明らかに
- e: 6。近ごろの若いものは
- f: 9。レジャーと労働の結合
- g: 7。フリーセックスと家庭
- h: 8。教育革命を断行せよ
- i: 5。教師の給料を大幅アップ

**a: 1。木田川氏による問題の提起**

木田川氏によつて最初に提起された問題は次の問題です。

(1) この問題提起の前提条件

「いまは、科学と技術が急速に進歩して社会が大きく変化している時代だ。」  
(安部公房は即座に同意してゐる。) そこで、

(2) 提起された問題

①「このような機械文明の中で真剣に考えなければいけないのは人間の問題でしょう。」

②「人間のあり方、生きがい——ということまで含めて、新しい目で現代社会と人間とを見ていくことが必要になる。今日の物質的繁栄のすばらしさに対して人間抑圧という二律背反の問題をどうみるか。」

③「合理化、機械化による能率追求が進められる一方で、人間性が失われるとか、生きがいを感じられないということ。」

④現実の中で経営者の立場から問題を解決しようとする、常に思考と実践、理論と実践を一致させねばならない。経営者の「苦悩」と「模索」が、ここにある。

今の世に理論と実践を一致させて経営しようなどといふ経営者が一体何人ゐるものか。私が思ひつく経営者の型(タイプ)を挙げれば、宗教に入つて行つて(例: 仏教)、その理論を実践しようといふ型が多いのではないかと思ふ。二つ目の型は、物理学などの理系の科学を専攻して、世に出て経営者になる場合に、数理的法則を現実に応用して理論と実践の一致を図る型。三つ目は、さうなると、人文科学を専攻して、人文科学の理論を現実に適用する場合が考へられますが、しかし人文科学の理論は正しさを証明されてゐないことが多いので(例: マルクス主義)、実際の役には立たない。従ひ、四つ目の型として、自分の人生観を磨きながら(起業の初心といつてもよい)これを元にして理論化





し、実践との一致を図るといふ此の型の経営者が一番多いのではないかと、これは私の経験からさう思ふ。五つ目には、以上四つの型の組合せが幾つか考へられる。木田川さんといふ方は「大正十五年に東京大学経済学部を卒業して東京電灯株式会社（東京電力の前身）に入社」とありますので、経済学だけでは大きな組織をまとめることが難しいといふ問題を個人的には経営者として抱へてゐることになります。

安部公房をこれらの型で見ると、二つ目の数学的法則（topology）を言葉の世界に応用した作家といふことになります。それ故にチェニジーといふ冬場の滑り止めのタイヤのチェーンの発明でスイスの国際的な賞を取るといふことになる。例によつて例のごとく、上の経営者の問題提起に対する安部公房の回答は「しかし、必ずしもさうとは限るまい」といふ言葉は口にしないが論理は topological な全体と部分を等価交換して入れ替へる回答で、恐らく木田川さんといふ人は驚いたに違ひない。

### （3）安部公房の回答

①「ふつう機械化という表現をとる場合には「人間が機械の一部になっていくんだ」と考えがちですね。これは、ある程度まで事実です。」「それで、そこから、人間の機械化、機械の部品化とかいう発想が出てくる。」（木田川氏同意）次からが安部公房の真価の発揮。

②「しかし、厳密にいうと、機械の一部ではない。むしろ、人間の組織構造が、ますます部品化していく（「分業や専門化がすすみ入れ替えがきかない組織になっていく。」）。人間の組織そのものが、もっと機械に似てくる——ということに過ぎないわけです。」

安部公房は初期安部公房の用語を使へば、有機物としてある人間の組織全体が、無機物としての部分的組織に変形すると言つてゐるのです。このとき、組織の外部に何が等価交換さるべきものとして既に（超越論）それ「以前」の問題として（超越論）組織と人間の関係といふ隙間に（超越論）存在してゐるのかを、これから安部公房は相手に応じて回答を提出することになります。

以上が、冒頭の問題提起の章です。

### b: 2. 巨大化する組織と人間

木田川氏は、標記の問題、即ち組織の巨大化と人間個人個人の幸せの喪失の間



題解決の結果状態を、「人間の労働の喜び、生きる喜び、幸福の問題」と呼んでゐる。「東京電力は従業員三万五千人」。しかし、この社員一人一人の問題の解決は巨視的には一企業だけの解決することは難しい。私の子供時代からの社会観察では、次の三つの成長が同時に起きなければ、社員個人は幸せにはならない。

- (1) 国家のGDPが成長する (国家の経済的成長戦略)
- (2) 企業の売り上げと利益率が成長する (企業の成長戦略)
- (3) 社員の所得が増大する (個人の資産成長戦略：節約と消費と投資の均衡の問題)

1960年代の、このふたりの対談した時までの日本の経済成長と企業の成長と個人と家族の成長は、三つとも上昇して来た。その十年間の最後の年に此の対談のあつた事は、次の1970年代以降の日本の経済と企業経営のあり方を、コンピュータの発達と企業内導入による然るべき成果の創出といふことで、これから問題になるといふ予見の対談であつたといふことになります。対談の当時はIBMが一極集中型・一党独裁型の大型コンピュータを世界中に販売して大成功を収めてゐた時代で(1965年以降)、この対談のあつた次の年は過去最高の売り上げ(7,500Mドル)に達してゐる。これに対抗してアップルのスティーヴ・ジョブズが小型の個人向けコンピュータを開発をして最初のマッキントッシュの販売を始めたのはもう少し後になのことで(1984年)。

さて、このやうな時代背景にあつてもなくても、安部公房のコンピュータの使い方に関する考へは首尾一貫してゐて、言語の世界の文学の場合と変はらない。コンピュータの二進数のデジタル言語も人工言語と呼ばれて共有する論理も、感情を除けば、自然言語と呼ばれる私たち人間の言語と同じです。その考へは次のやうなものです

- (1) 旧来の考へ方「これは不便だから、人間をコンピュータに変えよう」といふのではなく、これからの考へ方は「いままで全然やらなかったことをやらせようというふうに、コンピュータを能動的に使う段階が、間近にやって来ます。」つまり、
- (2) 「コンピュータによって、これまで人間の力で開発できなかったものが、開発される可能性があるとうことです。そうした時代になって、初めてコンピュータ時代を実感でとらえられるようになる。」しかし、



(4) 「いまから「コンピュータとは何か」ということの哲学的な意味を、はっきりつかまえておく必要がある」。

そして、最後の(4)の目的のための安部公房の発言もまた、「曇りガラスを透かして太陽を見る」といふ陰圧で現実を胸一杯に吸い込むS・カルマ氏の方法といふべき間なのです。

(5) そこで「コンピュータとは何か」ということですが、これは逆にいうと「コンピュータにできないものは何か」ということですね。」そして、その典型例として、翻訳と問題提起の二つを挙げるのですが、上述の通り、翻訳は既にソフトウェア・プログラムによつて達成されてゐるので、残るは問題提起といふコンピュータには出来ない仕事は私たちの仕事であるか、コンピュータにどこまでこれが出来ない可能性が論理的にあるかといふ吟味をすることになる。この問答は次の見出しの元に対談されてゐる。

### c: 3。人間頭脳とコンピュータ

(1) 安部公房曰く「もう一つ、コンピュータがまったくダメな点といえば問題提起能力がないことです。」

これが、人間頭脳とコンピュータの能力の違いです。

ここまで読んで来て判ることは、東京電力の社長の言葉は非常に抽象的な水準にとどまつてゐて(例：人間、機械化、自動化、人間疎外、マスの組織時代への不適応等々)、具体的な現場の処方箋に繋がる物理的階層の提示ができてゐないといふことです。このやうな経営者の発言を受けて、この章の冒頭で安部公房の提案するのが上記(1)の、まづは人間とコンピュータの能力の違いの指摘です。その上で、安部公房は組織との関係で、従ひ、社会との関係でと考へ直してもよいのですが、次のやうに問題を巡る個人としての人間の能力を更に二つに分けるのです。

①解答能力

②問題提起能力

(2) 「いまの教育は、もっぱら解答能力を要求するものだ。「何々を解答せよ」ということが、人間の能力をはかる尺度です。教育の方法から試験の方法、会社の採用試験のときも、解答能力ではかられる。つまり、いままでの優

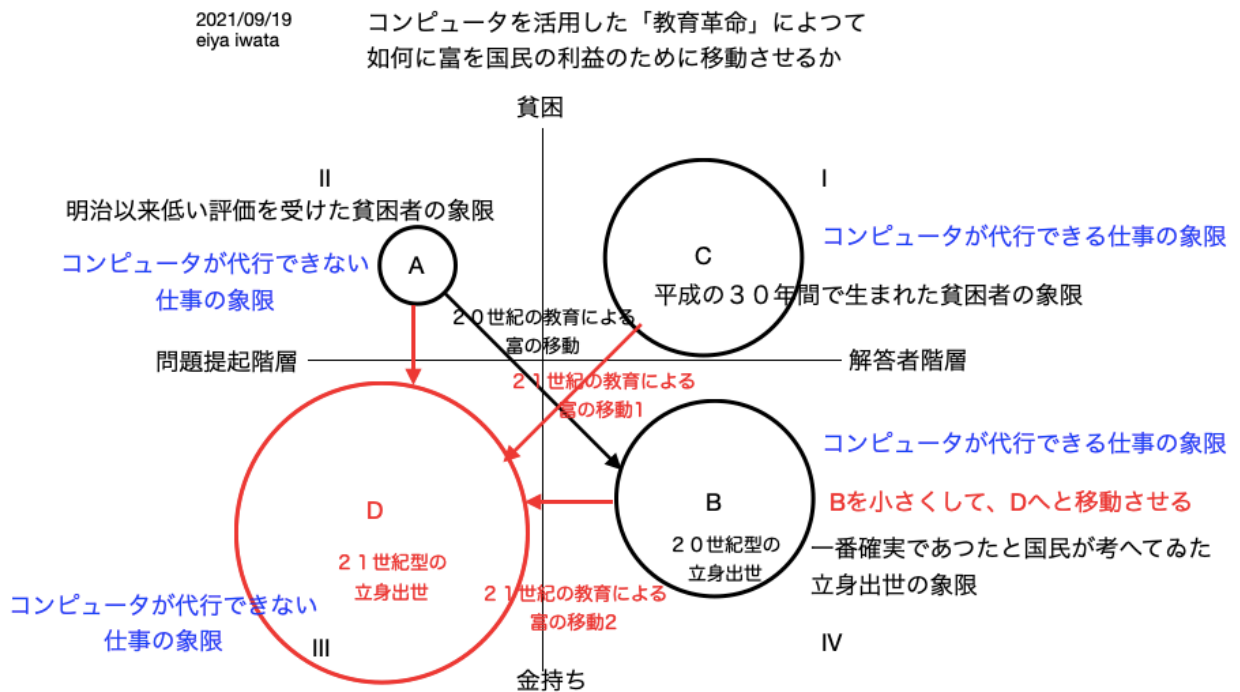




等生は全部よき解答者にすぎないんです。」ところが、

(3) 「これからはコンピュータがありますから、解答者は要らなくなる。必要なのはむしろ問題提起の能力、つまり、ぼうばくとしたある欲求を、一つの問題として集約し、コンピュータに与える能力がないと人間としての能力じゃなくなる。これからの教育は、問題提起能力をどう開発するか、ということが中心となるでしょうね。/そして、人間の基本的な価値判断の尺度として、問題提起能力を重視するという時代が、本当のコンピュータ時代ですよ。そう考えると、一種の人間の価値革命ですね。」

この後の安部公房の発言は、既に昔の「貧困と金持ちということで分けた」分け方の問題は解決したので、「いまは、労働者の絶対的貧困ということはないかわりに」、当時の盛んだつた学生運動の強い動機が、このコンピュータ時代の到来に応じた「問題提起する階層と、問題を与えられて解答する階層と、この二つが分離してしまう」問題だと指摘して、これが「こんご、資本主義社会が優先的にこの問題に取り組んで勝っていくか、社会主義社会か、おそらくこれはおもしろい勝負でしょうね。」といつて今日を予見してみますが、どうやら今日では情勢は社会主義が優勢であつて、その結果当時は解決されてきた「労働者の絶対的貧困」といふ問題が再び、日本なら日本の国民愚弄張る政府と官僚の悪しき政策によつて逆戻りになつてしまつてゐるといふのが、私の現状・現実認識です。あなたにも異論はないと思ふ。マルクス主義または極左・共産主義によつて人類は進歩せずに、明らかに退歩してきたのである。そこで、これからの世直しを考へる縁（よすが）として、以上の安部公房の論理を座標に描いてみると、国家としての日本政府の執行すべき政策が如何なるものが実に明らかとなるのです。この図のダウンロードは：<https://docdro.id/tqfinRb> 図の後に此の図の解説をします。



この座標から次のことが判る。

(1) 今流行のAI（人工知能）の活躍する象限は、IとIVであること

(2) この象限の割り振りからいつて、右半分の解答者階層軸の上下が、AIの活躍する領域であるので、相当に規模の大きい市場が生まれるといふこと。専門家たちは既に計算済みの筈。この文章を書いている時点で、ネットの情報では「人工知能（AI）の市場規模、2026年に3096億米ドル到達予測」とのことである（<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000079.000071640.html>）。この市場調査レポートの目次を参照するには：【当レポートの詳細目次】：<https://www.gii.co.jp/report/mama1004309-artificial-intelligence-market-by-offering.html>

レポートの目次を見るだけで、世界中の投資のどの事業分野に傾注されるかを知ることができます。日本についても同様と考へられる。あなたが資産を増やしたいと思へば、株式相場に投資する目安と、このレポートはなるでせう。

上図を見て、象限IIに今ある人々を0にすると全体のバランスが崩れますから、行ふべきはそのような施策ではなく、縦軸の（貧困、金持ち）の格差を公平に社会的正義を実現しながら均衡にもつてゆく国家政策が必要といふことになります。その時には、上記に挙げた三つの同時並行成長曲線の実現を図ることであり、この「(3) 社員の所得が増大する（個人の資産成長戦略：節約と消費と投資の均衡の問題）」については、国家と企業による教育が必要かも知れませんが、ソクラテスのいふ通りで、喉の乾いてゐない馬を水飲み場に無理やり連れて行つても水を飲ませることはできませんから、その種類の人たちは放つておいて、関心のある人たちだけの自己啓発に任せて、ここは個人の自由にするのが得策かも知れません。向上心のない人たちに無駄な税金を投じても価値がない。安部公房は此の富の移動を「教育革命」によつて成し遂げることを提案してゐる。しかし教師の給料を劇的に上げるだけでは富の移動といふ問題は解決しないので、それに効果は逆で金を目当てに碌でもない人間たちばかりが集まつて来て教育の質が下がるかも知れないので、この提案の欠点批判を含めた私の「教育革命」案は後述します。

このやうな安部公房の提示した解決策に対して、木田川氏は依然として抽象的な言ひ方でしか目指すところがいへてゐませんが、しかし、読者に判ることは、組織の中で社員一人一人が個性に応じた能力を存分に発揮してほしいといふ強い願ひです。これを経営者の立場からいふ言葉で、人間性の尊重、人間が主体にならなくてはいけない、と述べてゐます。続けて企業の課題は「自由な個性の中に潜在的に持つ創造性の欲求をいかに発揮せしめ、それを組織化し、社会進歩に役立てていくことができるかどうか——これが課題です。」と同氏



は述べてゐる。そして、このやうな時代の転換期は価値観の転換期なのであるから、自分たちのやうな年配者よりも、安部公房のいふ問題提起型の人間になり得るもつと思考柔軟性のある若い世代に期待して、この世代の育成をしたいといふ抱負を述べてゐます。しかし、その動機と目的は全く共産主義的で、かういふところが今も大手企業の経営者の弱点になつてゐるのだといふことがよく判る。しかし、この経営者が言葉を正しく使つてゐることとその言葉の実現に積極的に責任を負ふ覚悟をして毎日仕事をしてゐるから、尚更世の中は共産主義的になつて行き今日に至つてゐる。この方の責任感と誠実さは読者に伝はつて来ます。その動機と目的とは、かうして「新しい世代の誕生がなければならぬし、そうしてこそはじめて人類の限りない進歩というものも可能になってくるのですから、積極的に歴史の創造に新しい人たちが参加しなくちゃいけないということ、最近考へてゐるんですよ。問題提起こそが必要であり、それが進歩の原動力であるということは全く同感で、貴方がおっしゃつたように、いま日本は国内的にも国際的にも価値観の転換とそのうえに立つた諸々の改革の必要に迫られてゐる時なのですね。」といふ此の改革がその後どうなつたか。二十一世紀の第一四半期にゐるわたしたちから見ると、これは当初の此の経営者の意図が実現の途中で歪曲されてしまつたか、そもそも最初から間違つてゐたかのどちらかです。あなたにおかれては如何考へらるるか。

この意図の実現の方法論をめぐつて、そこで次の章では、如何に「問題の所在を明らかに」するのかを、価値観の転換といふ論点から安部公房が口火を切ると、そのあとに木田川氏がほとんど一人で此の主題を独占して弁舌をふるつてゐます。今読むと、当時の経営者の知的水準と展開する論理の道筋がよく判ります。当時の大企業の経営者には、今の碌でもない守銭奴・銭ゲバ社長とは違つて、人の範となるべき誠実といふ徳があつたことが判ります。安部公房の価値論は、いふまでもなく20歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』以来の延長に依然としてあるのです。なぜなら、この論文は価値論であるからです [註●]。

[註●]

『中壘肇宛書簡 第一信』（全集第1巻、68ページ下段）に十九歳の安部公房の次の言葉がある：

「僕は今、受動的自己証認に於ける、而してそれにより開示される所の人間の（主観的一観念以前）特殊性について、又その立場より考査される所の新価値論とも云ふ可きものの体系、若しくは方法に思考を集中して居ます。」

（続く）





## 縄文紀元論

## Topologyで日本人を読み解く（19）

## 5.16.4 八の音義は何を意味するか（承前2）

## 目次

## I 縄文紀元日本語論

## 1. 日本語と漢語の関係

Intermezzo：何故日本にはキリスト教徒が全人口の1%しかみないのか？

## 2. 日本語の音義と概念の関係：五十音表とは何か

## 3. 五十音表を記号化する

## 4. 日本人の言語宇宙

## 5. 古事記の宇宙観

## 5.1 高天原とは何か1

## 5.2 カミとは何か1

## 5.3 高天原とは何か2

## 5.4 日本語の特殊の中の普遍

## 5.5 海の民のお祭りと超越論の関係

## 5.6 天照大神とは何か

## 5.7 月読命とは何か

## 5.7.1 月とは何か

## 5.7.2 月読命とは何か

## 5.7.3 月読神社とは何か

## 5.7.4 ヤシロとは何か

## 5.7.5 「鹿座神影図」を読み解く

## 5.7.6 磐座と注連縄の関係

## 5.7.7 亀の甲羅とは何か

## 5.7.8 習合とは何か

## 5.8 カタカナとひらかなの関係

Intermezzo 2：海風之大刀（アマナギ・ノ・タチ）は一体どんな姿をしてみるのが

## 5.9 日本位相習合史

## 5.10 何故国家は単数または複数の神とともに生まれるのか

## 5.11 かごめかごめの歌は一体何を歌っているのか

## 5.12 縄文土偶とは一体何か

## 5.13 習合といふ漢意をやまところどこで何といふのか

## 5.13.1 位相史のための紀元の分類

## 5.13.2 淤能碁呂島とは何か

## 5.15 縄文土器とは何か

## 5.16 大祓へを読み解く

## 5.16.1 何故私たちは御祓を必要とするのか

## 5.16.2 大祓へに唱へられる「聞こし召す」とは何か

## 5.16.3 「聞こし召す」前に「しろし召す」がある

(1) 第一段：高天原八百万神大祓ひ会議

(2) 第二段：大倭日高見国内の天津罪と国津罪の分類と大祓

(3) 第三段：大倭日高見国は大祓の結果どうなつたか

## 5.16.4 八の音義は何を意味するか

Intermezzo 3 伊勢神宮とは何か

Intermezzo 3-1 伊勢神宮をやまと言葉で読む

## 5.16.4-1 八の音義は何を意味するか2



青字は既論の章、赤字は今回論ずる章、黒字はこれから論じる章

- 5.16.5 誰が「しろし召し」誰が「聞こし召す」のか
- 5.17 紫式部の超越論『源氏物語』
- 5.18 「蟲めづる姫君」はカタカナとひらかなを如何に使ひ分けてゐるか
- 5.19 ダイダラボッチと巨人伝説：大倭日高見国と播磨国：房総半島と瀬戸内海の交流の歴史
- 5.20 日本人はどこから来たか

## II Topologyで縄文土器を読み解く

- 0. 縄文土器の概念と分類
- 1. 紋様とは何か。目とは何か
- 2. 縄文土器の構成要素
- 3. 縄紋は縄目と渦巻き紋様で出来てゐる
- 4. 縄文土器は三階層で出来てゐる
- 5. 縄文土器には開口土器と閉口土器の二種類がある
- 6. 縄文土器は私たちの宇宙観を体現してゐる
- 7. メディア（媒体）としての縄文土器
- 8. 弥生式土器は二階層で出来てゐる
- 9. メディア（媒体）としての弥生式土器
- 10. 縄文土器と弥生式土器の関係（topologicalな連続性）：3（奇数）から2（偶数）へ
- 11. 銅鐸は7階層で出来てゐる
- 12. 縄文土器の政治と弥生式土器の政治：土器と政治の一体と分離：銅鐸とは何か1
- 13. 縄文土器の経済と弥生式土器の経済：土器と経済の一体と分離：銅鐸とは何か2

## IV 21世紀の現代に縄文土器はどのやうに生きてゐるか

## VII 20世紀の幕を閉ぢ、21世紀に生きるための結語

\*\*\*

### 5.16.4-1 八の音義は何を意味するか（承前3）

以下、《ヤ》といふ音義をこれらの鹿と馬の耳の形象論として論じます。

#### （4）左男鹿（さをしか）の八（やつ）の耳を振立て

大祓詞（中臣祓）の最後に「八（やつ）の耳」が出てきます。大祓全文のダウンロードは：<https://docdro.id/7GVX8B7>

「八百万の神等諸共に 左男鹿の八（やつ）の耳を振立て  
所聞食（きこしめ）せと申（まを）す」

といふのが、この縮めの二行です。

同じ文句は、卜部神道の『神変自在穢成浄上科津祓』（じんぺんじざいへんゑせいじゃうのかみしなつのはらひ）および『神通自在心源清浄之下科津祓』（じんつうじざいしんげんしゃうじゃうのしもしなつのはらひ）にも、ともに、「祓賜（はらひたま）ひ清賜（きよめたま）ふ事の由（よし）を」の次に、このお祓ひされて清められた由を「聞食（きこしめ）せと申（まを）す」のだと、最後の箇所でててきます。また、『天地一切清浄祓』（てんちいつさいしやううじやう

はらひ)といふ短い祝詞にも最後に同じ文句があります。『天地一切清浄祓』のダウンロードは：<https://docdro.id/DipdujD>

大祓その他の祝詞の最後の位置にこの文句が来るといふことから解ることは、

- ①これは、大祓ならば第二段で大祓ひがなされて日本国中の罪穢れが祓ひ清められたあとに祝ふ、それこそ祝詞であり、宣(の)るためのト(門)即ち場所としての、動物の備へてある宣るための門、即ちノリ・ト(門)です。
- ②このト(門)の意味である二つ耳の門(ト)を立てて《ヤ》の音義を示す姿が、「左男鹿の八(やつ)の耳を振立て」た姿である。
- ③「振り立てた」とあるので、生命の盛んなるサマをいふのです。この鹿の姿が奈良に棲む《カ》の子の姿であり、「さを」と鹿の前についてゐるのは、若いといふ意味でせう。余談ですが、竿竹と今は漢字で書いて竹の使用目的を意味する表記になつてゐますが、これも「左男」竹であるのかも知れないのです。
- ④「さを」に「左男」を当て字にしたのは、国産みの話と同じで、左優位・右劣位といふ動的秩序の表現で、かく「左男」と表記すれば、この鹿は若い雄の鹿の命溢れる、これから大きく成長してゆく完璧な天(あめ)の、天津の、南太平洋の海の豊饒と夜の海上で仰ぐと降るやうな星空の世界をそのまま地上に写した動物であるといふ意味になるでせう。何故お祓ひされて清められた由を、さを鹿や次の(5)の斑駒を媒介にして(もしいへるならば依代といつてもよい)「聞食(きこしめ)せと申(まを)す」のかは、大祓の第三段の式次第のところまで此の問題を後述します。

#### (5) 「天(あめ)の斑駒(ふちこま)の耳振り立てて聞食せ」

同様に、伊勢神宮の「耳振り立てて」歩む斑駒の写真を掲げます。これが「斑駒」であつて、馬の体に斑がなければならぬ理由と、何故両耳のト(門)がピンと立つて《ヤ》の音義を体現する若駒でなければならぬのかといふ理由は、鹿の場合と同じです。





内宮の鳥居の柱

実は、伊勢神宮の内宮の鳥居の柱や、鳥居を潜つて参道を進み、内宮本殿の入り口に近く至る此処の内宮を囲む参道側の塀にも、この《ヤ》が植物（名前が今不明です）の作る形象として打ち付けられています。写真を示します。



内宮本殿の入り口に近く至る参道側の塀に打ちつけてある《ヤ》



鳥居の柱に打ちつけてある《ヤ》と同じ形象同じ植物です。

(6) 正月の門松とは何か

このやうに考へて来ると、何故門松があのような形をしてゐるのか、何故門の両耳のやうにしていつも一対で置かれるかの理解を自然にすることができます。注目すべきは、上二つの鹿と駒の例で説明を忘れましたので、ここで述べますと、竹の切り口の形象が左男鹿と斑駒と同じく、斜めの切り口の形状をしてゐなければならないといふことです。竹は南太平洋の諸島にも繁殖してゐる。かぐや姫の見つかった翁の竹の切り口も同じ斜めの切り口であつたに違ひない。そして、この切り口をした竹の三本で構成する門松の形は、やはり《ヤ》の音義を表してゐる。この切り口の形については、大祓の第二段の大祓をする際の形象の問題として後述します。これは、地（つち）の植物を使つて大祓をする際の形象なのです。かうして、海では潮の交差を、地では植物の交差を、また動物の持つ交差を、生命の誕生と自然の豊饒の恵みの象徴となるまでに《ヤ》の音義は概念化され、海と陸の第一次習合の精華となつて、今日に至つた。

(以下次号)





## 編集後記

●巻頭詩（26）：防波堤：安部公房：これは、初期短編の『洪水』の世界です。のちの長編傑作『第四間氷期』の世界です。

●周辺飛行（50）：4。『安部公房スタジオ会員通信』（5）：第5号：この通りの当時の安部公房スタジオの活動だったのですね。安部公房は多忙でした。

●『文章読本』論（5）：川端康成：作家と批評家の求める日本語のあるべき姿が非常に明確になりました。やはり連載を始めてよかったと思ひました。

●*Mole Hole Letter*（64）：超越論Ⅱ（第七回）：これもやつと近代ヨーロッパ哲学の整理ができたとしみじみと感じてゐます。自己の発見こそ、やはり一番大切です。長かったなあ、150余年か。「近代の超克」に四世代を必要としたのですね。

●サンチョ・パンサを求めて（16）：コンピュータ時代にはどんな人間が強いか（1）：安部公房の先見の明や誠に鋭し。あとは次回に仮設定といふ能力要件を追加して論じたい。要するにAIの時代には論理的・科学的にもものを考へて問題解決できなければ、つまりAIに情報をインプットして使へなければ役に立たない解答者軸に陥ることがわかりました。

差出人：

安部公房の広場

〒182-0003東京都調布市若葉町  
「閉ざされた無限」

●縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（21）：5.16.4 八の音義は何を意味するか（承前3）：これも、思ひつくままに、落穂拾ひです。終結間近。終はつたら、狭義の文学一本槍に戻ります。

安部公房の広場

連絡先：[eiya.iwata@gmail.com](mailto:eiya.iwata@gmail.com)



【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館  
「何處にも無い図書館」

【もぐら通信の編集方針】

1. もぐら通信は、安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものです。
2. もぐら通信は、安部公房という人間とその思想及びその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものです。
3. もぐら通信は、安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものです。
4. 編集者自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うものです。